

札幌市文化財調査報告書
XVIII

1978

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 XVIII

S411 遺跡

1978・3

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、札幌市白石区大谷地の「札幌新道」,「高速自動車国道北海道縦貫道函館旭川線新設事業(縦貫自動車道)」南インターチェンジ新設予定地域内に所在する、S411遺跡の発掘調査報告書である。尚、遺跡の地番は、札幌市白石区大谷地882番地である。
- 2 調査は、昭和52年5月23日より8月13日まで延べ72日間の期間であった。
当初の調査対象面積は、5,000㎡であったが、遺構群の広がり等より実質発掘総面積は、7,800㎡である。
- 3 調査は、日本道路公団札幌建設局及び、北海道開発局札幌開発建設部から札幌市への委託業務として、札幌市教育委員会が発掘調査主体者となり、札幌市教育委員会文化財調査員加藤邦雄を担当者とし、実際の現場の仕事は同羽賀憲二が上野秀一の協力を得て遂行した。
- 4 本書は、羽賀が編集し、加藤、羽賀が分担執筆した。
- 5 た発掘調査には、下記の人々が従事した。
大滝信芳、右衛門佐時雄、金井邦彦、田部淳、朝日章、浦口まもる、岡田知子、西条美智枝、酒井洋子、高杉順子、横地桂子
- 6 整理作業については、下記の人々の協力があった。
大滝信芳、右衛門佐時雄、岡田知子、西条美智枝、酒井洋子、高杉順子、横地桂子(以上順不同、敬称略)
- 7 発掘調査、整理作業においては、下記の機関、人々より協力と助言を賜った。
北海道教育庁振興部文化課
札幌商科大学・札幌市文化財保護審議会委員 大場利夫教授
北海道開拓記念館 野村崇氏
札幌大学 木村英明助教授
- 8 石器類の石質の肉眼鑑定は、北海道開拓記念館赤松守雄氏に御願いした。
- 9 発掘期間中、整理、報告書出版に至るまで「日本道路公団札幌建設局」「北海道開発局札幌開発建設部札幌新道建設事務所」さらに直接工事にたずさわっていた「戸田建設㈱・勇建設㈱道央自動車道平岡工事共同企業体」には、種々の御協力と御理解を賜った。記して謝意を表する。

目 次

第1章 発掘調査に至るまでの経過	7
第2章 遺跡の位置と環境	11
第3章 発掘区の設定と遺跡の層序	15
第1節 発掘区の設定	15
第2節 遺跡の層序	15
第4章 遺 構	16
第5章 発掘区出土の遺物	23
第1節 土 器	23
第2節 石 器	24
第6章 陥穴と考えられる遺構群について	28
附 陥穴と考えられるピット群の発見された遺跡地名表	37

挿表目次

第1表	陥穴と考えられるピット群の発見された遺跡地名表	39
第2表	S411遺跡遺構一覧表	84
第3表	S411遺跡出土石器類計測表	84

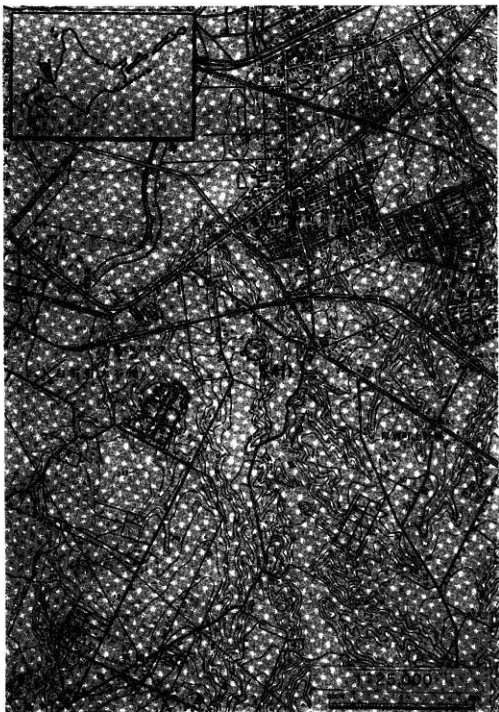
挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地形図 (1:25,00)	6
第2図	遺跡付近地形図	折込
第3図	発掘区配置及び遺構関連図	折込
第4図	遺構実測図 (第1号, 第2号Tビット)	17
第5図	遺構実測図 (第3号, 第4号Tビット)	19
第6図	遺構実測図 (第5号, 第6号Tビット)	21
第7図	発掘区出土土器拓影	23
第8図	発掘区出土石器実測図 (1)	25
第9図	発掘区出土石器実測図 (2)	26
第10図	発掘区出土石器実測図 (3)	27
第11図	薮ヶ丘遺跡のビット分類	30
第12図	ビット埋没模式図	34
第13図	S267・268遺跡のビット分類	35
第14図	陥穴の型態分類	38
第15図	各地の陥穴 札幌市S267・268遺跡 (1)	60
第16図	各地の陥穴 札幌市S267・268遺跡 (2)	61
第17図	各地の陥穴 札幌市S267・268遺跡 (3)	62
第18図	各地の陥穴 北海道松前町大津B遺跡	63
第19図	各地の陥穴 青森県千歳遺跡 (1)	64
第20図	各地の陥穴 青森県千歳遺跡 (2)	65
第21図	各地の陥穴 埼玉県坂東山遺跡 (1)	66
第22図	各地の陥穴 埼玉県坂東山遺跡 (2)	67
第23図	各地の陥穴 千葉県上ノ台遺跡	68
第24図	各地の陥穴 東京都日野市高橋台遺跡 (1)	69
第25図	各地の陥穴 東京都日野市高橋台遺跡 (2)	70
第26図	各地の陥穴 東京都八王子市寺田遺跡	71
第27図	各地の陥穴 東京都八王子市寺田遺跡 (9~16) 鶴田第V遺跡 (17~20)	72
第28図	各地の陥穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群 (1)	73
第29図	各地の陥穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群 (2)	74
第30図	各地の陥穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群 (3)	75
第31図	各地の陥穴 神奈川県霧ヶ丘遺跡 (1)	76
第32図	各地の陥穴 神奈川県霧ヶ丘遺跡 (2)	77
第33図	各地の陥穴 長野県城の平遺跡 (1)	78
第34図	各地の陥穴 長野県城の平遺跡 (2)	79

図版目次

- 図版1 A遺跡遠景（北方向より）
B遺跡遠景（東方向より）
- 図版2 発掘区（北西方向より）
- 図版3 A発掘区（南方向より）
B発掘区（北西方向より）
- 図版4 A発掘区（西方向より）
B発掘風景
- 図版5 A第1号Tビット
B第2号Tビット

- 図版6 A第4号Tビット
B第5号Tビット
- 図版7 A第3号Tビット長軸断面
B第6号Tビット短軸断面
- 図版8 A発掘区出土石器
B発掘区出土石器
- 図版9 発掘区出土石器
- 図版10 発掘区出土石器



第1図 道神付近地形図（1：25,000）
本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭63道復第132号

第1章 調査に至る経過

高速自動車国道北海道縦貫自動車道函館旭川線新設事業と、いわゆる札幌新道建設事業にともなう埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、昭和49年に日本道路公団札幌建設局並びに北海道開発局札幌開発建設部札幌新道建設事務所と札幌市教育委員会との間で基本的な協議が行なわれた。札幌市教育委員会では、この協議の決定事項を受けて、同年にS267、S268遺跡の試掘調査を実施するとともに、翌50年5月には同路線内の包蔵地の分布調査を実施し、新たにS411遺跡の存在を確認した。

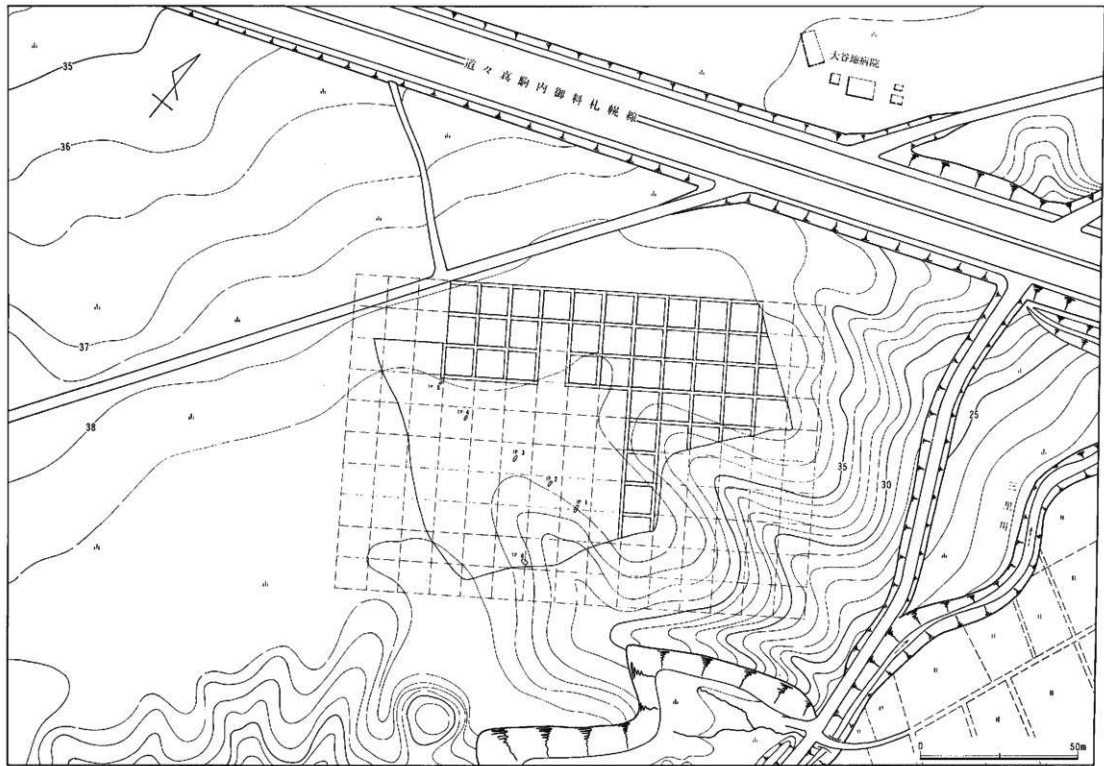
その後の協議により昭和49年度に試掘調査を実施したS267、S268遺跡については、昭和50年度に、S411遺跡は昭和51年度に調査を実施することとした。しかしS268遺跡の一部約4,000㎡に木買収地域が存在し、この解決が昭和50年度中に完了しなかったことから、この部分の調査に関しては、昭和51年度に持ち越すこととなった。

明けて昭和51年度は、S268遺跡の木買収地域とS411遺跡の発掘調査実施の計画を有していたが、S411遺跡の買収が遅れ調査の実施が不可能となり、前年度末調査のS268遺跡のみの発掘を実施した。S267、S268遺跡の発掘調査に関しては、昭和51年度の調査完了時点で札幌市文化財調査報告書XIVとして、すでに報告を完了している。

その後、S411遺跡については、昭和51年晩秋に用地の買収が完了し、昭和52年融雪後早急に調査を実施することで合意に達し、昭和52年5月契約が取り決められ、調査実施の運びとなった。縦貫自動車道の広島町大曲インターチェンジと札幌南インターチェンジ間は、道路工事そのものが、昭和52年度の着工となっていたため、発掘調査区と道路工事部分とが同一地域内で隣接しており、春特有の南の突風が吹けば火山灰の砂塵に見舞われるという悪条件のもとで調査が実施された。また、工事の工期との関連から、調査区を2区に分割し、調査を完了させた地区から即日工事が取りかかるよう調整したりした。

このように調査の条件には恵まれなかったが、遺跡が当初の予想に反し出土遺物、遺構が少なく、更には、教育委員会の業務がこの調査1件のみという状態であったために、当初契約では、報告書作成業務を昭和53年度に予定していたのであるが、12月に契約を改訂しすべての業務を昭和52年度中に完了させることとした。

本調査の実施にあたっては、日本道路公団札幌建設局、札幌開発建設部札幌新道建設事務所を始め、多くの機関からご協力を得た。



第2圖 道々村附近地形実測圖

第2章 遺跡の立地と環境

S411 遺跡は、札幌市域のほぼ東方に位置し、札幌市白石区大谷地に所在する。

尚、遺跡の地番は、例言に記したとおりである。

本遺跡の位置は、道々真駒内御料札幌線が国道274号線（札幌・夕張線）と交わる交差点より道々真駒内御料札幌線を約500m程南下した左側にある。

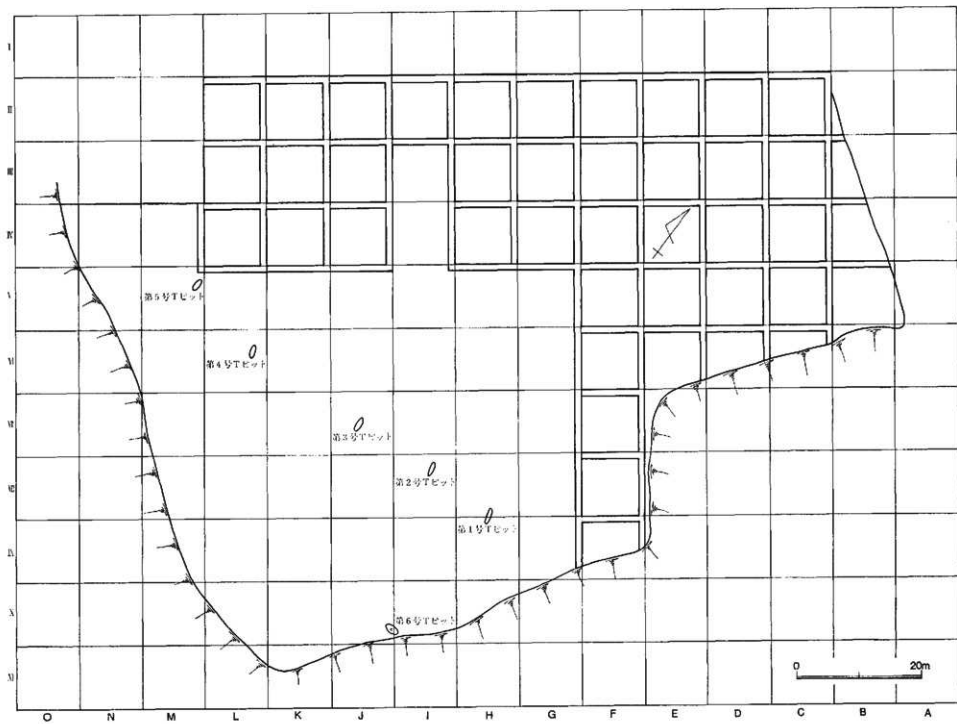
本遺跡をのせる台地は、江別市野幌より札幌市の東部さらに広島町へと連なる野幌丘陵上にある。尚、本遺跡付近は、豊平区里塚付近に端を発する二里川によって削られた河岸段丘が形成されている。遺跡の立地もこの三里川との関連にて考えられるものである。

遺跡上にて付近の地形を概観すれば、東側は、江別市に連なる野幌丘陵があり、両側には、月寒の丘陵地帯さらにその背後の山岳地帯がみわたせ、西側には札幌市は街並とその背後には手稲山系がみわたせる。北側は、石狩湾にまで連なる一段低い低地帯が続いている。

本遺跡をのせる台地は、台地の東北側を流れる三里川と、途中で三里川から別れ大谷地神社付近に流れ大きな沢を形成している二里川にはさまれる約1～2km程の幅を有している。二里川に関連し西南向きに台地上には近年発掘調査された、S267、268遺跡・S269遺跡・S262、263遺跡・S265遺跡・S266遺跡がある。S267、268遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居跡と陥穴群、S269遺跡では陥穴が2個、S262、263遺跡では陥穴群が、S265遺跡では、縄文時代中期の土壌墓と竪穴住居跡、さらに陥穴群が検出されている。二里川と三里川にはさまれる台地上の最北端に位置するのはS269遺跡であり三里川と二里川の分岐点を経て三里川下流域の一番はじめに位置するのが今回調査された本遺跡である。北に開口部を有するその周囲約5kmにもおよぶ馬蹄形状を呈する台地上の二河川に面する遺跡は、3年間にわたり全て調査された事になる。

傾向としては、二里川に面する南西き台地上の遺跡は、明確な遺構も検出され、土器、石器等の遺物も多いのであるが、北東向きの台地上になると明確な生活遺構は陥穴群のみしか発見されず、遺物も極端に少ないといった事が解った。

特に陥穴群についても、二里川に面する南西向き台地上に密に分布し、北東向きの台地上には少なくなる傾向がある。地形的な立地、風向き等も当然考えなければならないが、人々が生活して行く地域さらに狩猟場としての地域等ある程度の土地の利用に制約があった事等が理解されよう。



第1図 発掘区配置及び進捗関連図

第3章 発掘区の設定と遺跡の層序

第1節 発掘区の設定

本遺跡の発掘調査は、日本道路公団による北海道縦貫自動車道札幌南インターチェンジ建設予定地内に存在する為行われた事前調査である。

為に調査対象地は、縦貫自動車道の幅とさらにインターチェンジ建設によって破壊、破壊する地域一帯の南東向き台地の約5,000㎡が当初対象地として計画されていた。

発掘区域の設定にあたっては、縦貫自動車道の道路中心線を基線とし、幅は150m、長さ100mの範囲を1辺が10mの方形の網目をかぶせ、発掘区域とした。

発掘作業においては、10m×10mの1発掘区の北東・北西部分に地層観察及び廃土用の通路として1m幅を残し他の表土層はすべて剝土し、遺構を確認していくといった方法をとった。

発掘区の名称は、北東—南西にA～N区、南東—北西にI～XI区とした。

尚、本台地の南東部分は、かつては続きの台地部分があったのであるが火山灰採集の為大幅に削り取られており比高10m～15m程の崖面となっていた。遺構の分布状況より類推するならば当部分にも遺跡は広がっていたものと考えられる。

発掘対象面積は、当初5,000㎡で計画されたが、遺構の分布状況等よりその面積を広げ、実質発掘調査面積は、7,900㎡となり当初の計画より約1.6倍の面積を調査した事になる。

第2節 遺跡の層序

本遺跡での、遺物包含層は、表土層となる黒色を呈する腐植土が未発達な事とさらに開拓時より永年にわたる耕作によって地表下30cm内外黒色土の下面にある黄褐色粘土(ローム)にまでプラオの先がはいこみほとんどが攪乱されている状態であった。したがって出土した若干の遺物(土器、石器等)もその出土層位はすべて攪乱層であり、層位的な出土確認は全くなされてはいない。

この様な状況は、遺構確認作業も同様であり、発見された溝状を呈する陥穴と考えられる遺構も、攪乱された表土層を取り除いた黄褐色粘質土(ローム)の面にすべてその存在が確認されたものである。

遺跡の範囲の中では黄褐色粘質土(ローム)も無く、本来ならさらに下層にある黄褐色火山灰層(恵庭岳のものと呼ばれている)が耕作上下に直接出現する場所もある。

基盤は、灰褐色を呈する火山灰層で数十mの深さにまで達している。尚、この火山灰は支笏填土物と呼ばれているものである。

第4章 遺構

本遺跡からは、従来よりTピットと称され陥し穴と考えられている長楕円形の深い溝状のピットが6個検出されている。

第1号Tピット(第4図)(図版5A)

H-VIII区とH-IX区にまたがって存在し、長軸をN-18°-W方向に向けている。

規模は、開墾部にて280×74cm、墾底面では265×15cmと極端に狭く長くなっている。全体的な形状は、狭長な深い溝状を呈する。

短軸方向の断面は、開墾部がやや広がるV字状を呈するが墾底面近くに至りほぼ垂直に下る。墾底面は平坦である。

長軸方向の断面は、一方の壁は開墾部がやや広く墾底面に向ってほぼ垂直に下るが、他方の壁では開墾部より若干外側にえぐられるような感じでオーバーハングしている。

埋没した層序は下記に示す。

- 第 I 層：粘質を帯びた黒色土
- 第 II 層：粘質を帯びた黒褐色土
- 第 III 層：粘質を帯びた暗黄褐色土
- 第 IV 層：黄褐色土
- 第 V 層：さらさらしてしまり気のない暗黄褐色土
- 第 VI 層：黄褐色土(第IV層と同じ)
- 第 VII 層：暗黄褐色土(第V層と同じ)
- 第 VIII 層：黄褐色土(第IV層・第VI層と同じ)
- 第 IX 層：パサパサしてしまり気のない淡黄褐色土
- 第 X 層：暗黄褐色土(第V層・第VII層と同じ)
- 第 XI 層：灰白色火山灰層
- 第 XII 層：茶褐色土
- 第 XIII 層：黒褐色土

地山の層位は

- 第1層：黄褐色を呈する火山灰質粘質土(ローム状)
- 第2層：灰白色の火山灰層で支笏火山灰堆積物である。

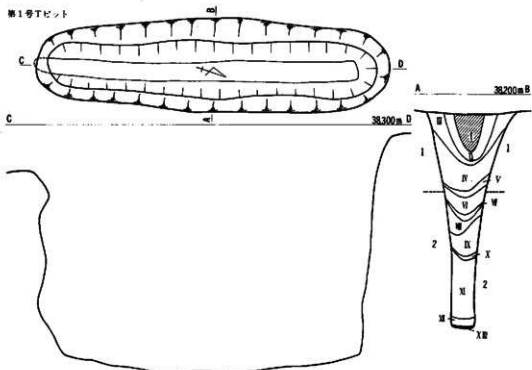
第2号Tピット(第4図)(図5B版)

I-VIII区に存在し、長軸をN-22°-W方向に向けている。

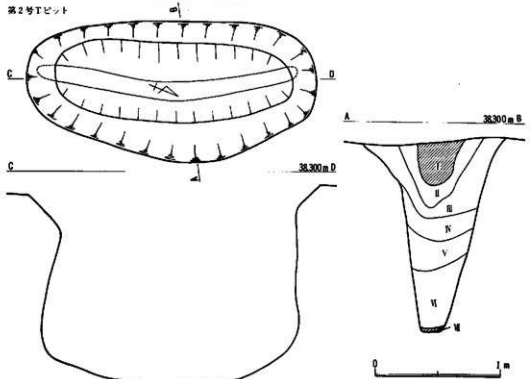
規模は、開墾部にて230×113cm、墾底部では206×15cmと極端に幅が狭くなっている。深さは、遺構確認面より最大で150cmと、かなり深い。

全体的な形状は、中央部にて若干くびれをみせるがほぼ楕円形で溝状を呈する。

第1号Tピット



第2号Tピット



第4図 遺構実測図

短軸の断面形は、V字形にちかく墳底面は第1号Tビット等に比してやや幅広である。
長軸の断面形は、長軸方向両端はややえぐり込みをみせ、墳底面は丸味を帯びている。
埋土の層序は、下記の通りである。

第 I 層：粘質を帯びた黒色土

第 II 層：粘質を帯びた黒褐色土

第 III 層：褐色粘質土

第 IV 層：黄褐色火山灰質土

第 V 層：灰褐色火山灰質土

第 VI 層：灰色火山灰

第 VII 層：ボンボンな黒褐色土

第 3 号 T ビット (第 5 図) (版区 7 A)

J-VII に存在し、長軸をほぼ南一北に向けている。

規模は、開墳部にて 218×75 cm、墳底面にて 229×19 cm を算し、深さは、最深部で遺構確認面より 161 cm である。

全体的な形状は、長楕円形の溝状を呈する。

短軸の断面形は、開墳部はやや広く、墳底部に近くなるに従って序々に狭くなっていく。長軸の断面形は、開墳部がややすぼまり、墳底部にて広がる「ケンチャク状」にもかい形となっている。

尚、本ビットは、長軸・短軸の両方向の埋土の層序を記録してある。埋土の層序は、下記の通りである。

第 I 層：粘質を帯びた黒色土

第 I' 層：黒色土ブロック

第 II 層：褐色粘質土

第 II' 層：暗褐色土

第 III 層：黄褐色砂質土

第 IV 層：褐色砂質土

第 V 層：黄褐色火山灰質土

第 VI 層：褐色火山灰質土

第 VII 層：灰褐色火山灰ブロック

第 VIII 層：黄褐色砂質土

第 IX 層：黒色土バンド

第 X 層：黄褐色砂質土

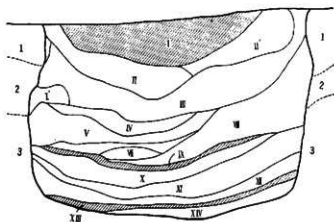
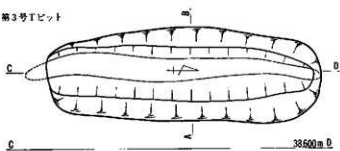
第 XI 層：褐色土

第 XII 層：黄褐色土

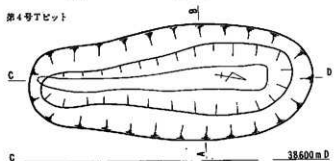
第 XIII 層：黒色土

第 XIV 層：褐色土

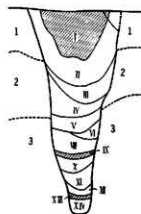
第3号Tビット



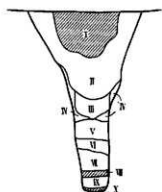
第4号Tビット



A 38500 m B



A 38600 m B



第8圖 遺構実測図

地山の地層堆積の状況は

第1層：黄褐色土（やや硬いローム）

第2層：黄褐色火山灰質砂がまじる硬いローム

第3層：灰褐色火山灰

第4号Tピット（第5図）（図版6A）

L-VI区に存在し、長軸はN-11°-Wを向く。

規模は、開墾部にて225×93cm、墾底面にて182×17cm、深さは最深部で、遺構確認面より160cmある。

全体的な形状は、長軸の北側の幅がやや広く、南側が若干狭くなるが、長楕円形の溝状を呈している。

短軸の断面形は、開墾部がやや広がっているが徐々に狭くなり途中からはほぼ垂直に墾底面へと至っている。

長軸の断面形は、やはり開墾部がやや広く北側の壁は、やや傾斜して墾底面へ接し、南側の壁では、墾底部近くにて若干えぐり込みがありオーバーハングし丸味を帯びながら墾底面へ接している。墾底面はほぼ平坦である。

埋土の層序は、下記の通りである。

第 I 層：粘質を帯びた黒色土

第 II 層：粘質を帯びた褐色土

第 III 層：暗褐色土

第 IV 層：黄褐色砂質土

第 V 層：褐色土

第 VI 層：黄褐色土

第 VII 層：褐色土

第 VIII 層：黒色土

第 IX 層：褐色土

第 X 層：黒色土

第5号Tピット（第6図）（図版6B）

M-V区に存在し、長軸方向をN-15°-Eに向けている。

規模は、開墾部にて205×83cm、墾底部にて183×13cm、深さは最深部にて遺構確認面より172cmを算する。

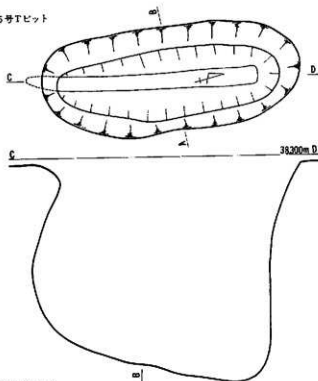
全体的な形状は、長楕円形を呈する溝状である。

短軸の断面形は、V字状に近く、長軸の断面形は、北側の墾底面は深く、南側に至って徐々に高くなり南側壁では大きなえぐり込みをみせオーバーハングしている。

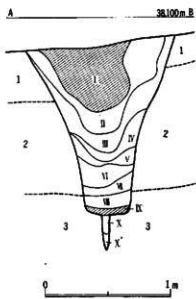
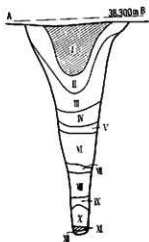
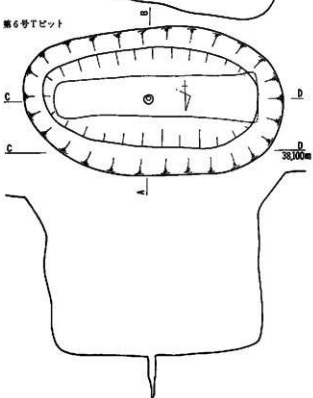
埋土の層序は、下記に示す。

第 I 層：粘質を帯びる黒色土

第5号Tビット



第6号Tビット



第8圖 透視実測図

第 II 層：粘質を帯びる暗褐色土

第 III 層：粘質を帯びる褐色土

第 IV 層：黄褐色土

第 V 層：褐色土

第 VI 層：黄褐色土

第 VII 層：褐色土

第 VIII 層：黄褐色土

第 IX 層：灰褐色火山灰

第 X 層：火山灰まじりの褐色土

第 XI 層：黒色土

第 XII 層：灰褐色火山灰

第 6 号 T ビット (第 6 図) (図版 7 B)

I-X, J-X 区にまたがって存在し、長軸を N-89°-W に向けている。

規模は、開城部にて 205×118 cm, 壙底部にて 162×32 cm, 深さは最深部で遺構確認面より 161 cm を算する。

全体的な形状は、楕円形を呈し、壙底面中央部に柱穴状ビットがある。

短軸の断面形は、開城部は広く壙底部に至って徐々に狭くなっていく。

長軸の断面形は、開城部が広がり、壙底部に向けほぼ垂直に壁が下り、壙底面近くになるとやや丸味を帯び壙底面へと至っている。壙底面はほぼ平坦である。壙底面のほぼ中央部には、直径 6 cm 内外、深さ 35 cm の先細りの柱穴状の小ビットがほぼ垂直にある。

埋土の層序は、下記の通りである。

第 I 層：粘質を帯びた黒色土

第 II 層：粘質を帯びた暗褐色土

第 III 層：褐色土

第 IV 層：黄褐色砂質土

第 V 層：灰褐色火山灰

第 VI 層：褐色砂質土

第 VII 層：灰褐色火山灰

第 VIII 層：褐色砂質土

第 IX 層：ボソボソの黒色土

第 X 層：VIII 層と同様の褐色砂質土

第 X' 層：灰褐色火山灰だがよごれがある。

地山の層序は、

第 1 層：黄褐色土で火山灰がまじる

第 2 層：軽石を多量に含む灰褐色火山灰

第 3 層：灰褐色火山灰

第5章 発掘区出土の遺物

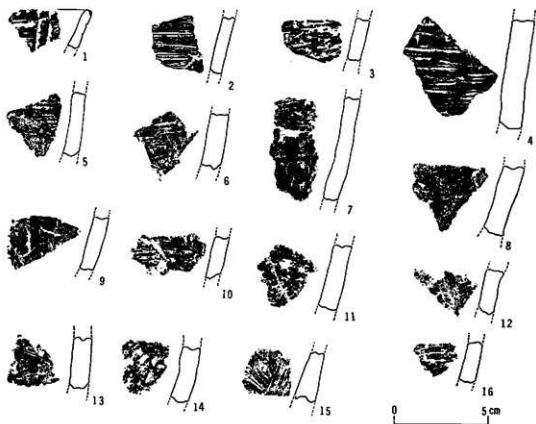
本遺跡からは、非常に数少ない遺物しか得られていない。さらにこの付近一帯の地質的な特徴として腐植土が未発達な事に加え開拓以来の永年にわたる耕作により基盤の黄褐色ローム層の上面まで擾乱がおよんでおり、出土した遺物もその層位的な出土状況は不明であった。

第1節 土器（第7図）（図版8A）

本遺跡より得られた土器群は、約数10片と非常に少なく、細片が多くその詳細な概要は解らないが、その主文様、色調・胎土・焼成等より縄文時代早期に位置付けられる貝殻文土器のグループであろうと考えられる資料である。

口唇断面はやや丸味を帯び、口唇下に連続したきざみ目がある。横位の貝殻による条痕がみられ、縦位の貝殻腹縁文が施文される（1）。

器面に横位の貝殻条痕文がみられ、貝殻腹縁文もみられる（2）。



第7図 発掘区出土土器

器面に横位の貝殻条痕文がみられる(3~6)。

器面に縦位の貝殻条痕文がみられる(15)。

器面にかすかな擦痕様があるがほぼ無文といってさしつかえないもの(7~14, 16)等である。

全例胎土中に火山灰粒を含んでおり、色調は赤褐色、焼成は非常に良好である。

器厚は0.8×1.2cm内外であり、器形は円筒形の深鉢形をなすであろうと推定される。

第2節 石器(第8, 9, 10図)(図版8B, 9, 10)

本遺跡では、石器類も土器群と同様にきわめて少量しか得られていない。

器種も少なく、時代の特徴等も明らかとはされていない。

以下各器種ごとに分類し、説明を加えていく。

石鏃(1~4) 全長が25mm~30mm内外で最大幅が12mm内外、重量が1g内外のもので、全例黒曜石が用いられ入念な両面加工が施こされている。

1は有茎であり、2・3は柳葉形をなし、4は二等辺三角形形状をなしている。

2, 3はエッジの一部を欠損しており、4は基部を大きく欠損している。

鋸先(5・6) 全長が30mm以上、最大幅は21.5mm、厚さも7mm、重量は3.2gと石鏃に比しやや大形となる鋸の類である。入念に両面加工が施こされている。

5は二等辺三角形形状を呈し柄部はない。

6は柄部の破片である。

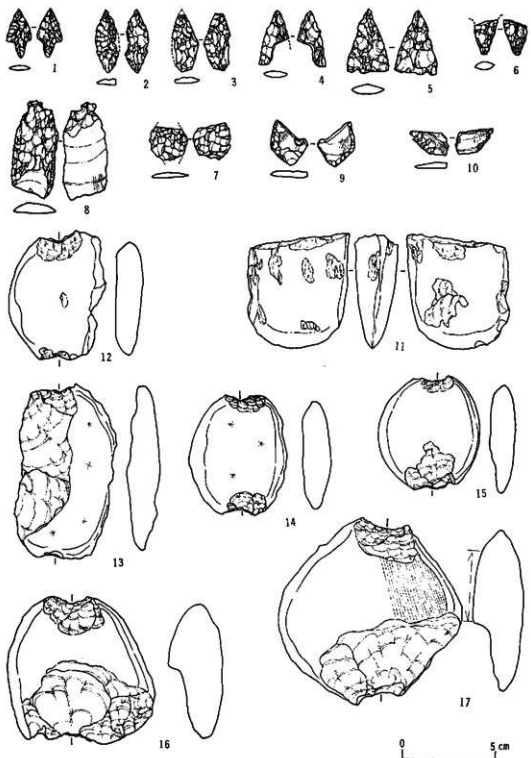
2点とも黒曜石製である。

両面加工の施こされた石器(7) 小型の両面加工が入念に施こされた石器で、尖端と基部が一部欠損している。ナイフ状石器かやや大型の鏃であろうか。

石匙(8) 硬質頁岩製であり、縦長の剝片の片面を入念に加工してある。刃部の腹面には加工がなされていないが、つまみ部分を作り出すためにこの部分だけ加工が施こされる。下端を一部欠損している。

使用痕のある剝片(9・10) 全例黒曜石の小型の剝片を素材として剝片の一個縁のエッジに剝離加工痕のあるものである。

石斧(11) 片岩製であり、入念な研磨が全面にわたって行われている。両刃であり、頭部を欠損している。



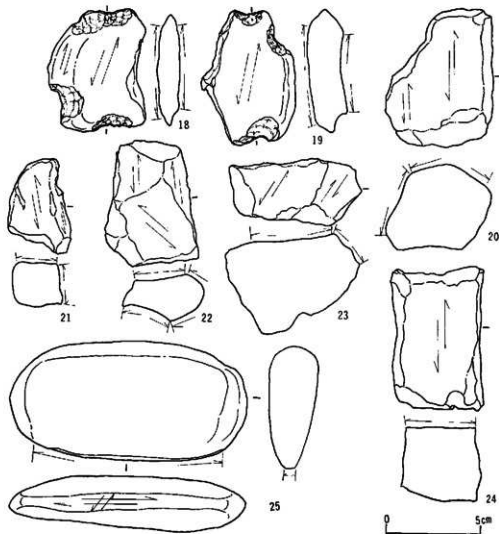
第8圖 兗州區出土石器

石鏝 (12~19) 直径5~10cm内外の扁平な河原石の長軸両端に打ち欠きがある石器群である。重量は50~200gの間にあり、大型あるいは楕円形でない石に関しては、さらに打ち欠き整形あるいは、重量を調節したと考えられるものもみられる。

17は、一部に細かな擦痕がみられ、砥石としても使用された可能性もある。

18, 19は、砂岩が使用され、両面とも砥石と同様な擦痕(擦面)がみられる。最初は砥石として使用された後に、なんらかの理由で石鏝として転用されたものであろうか。

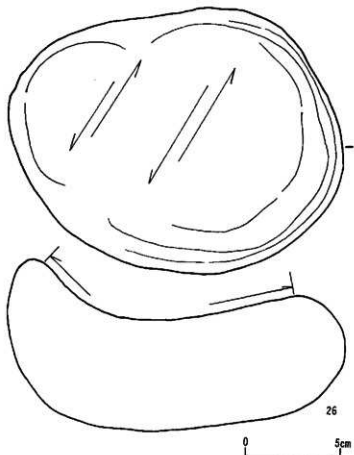
砥石 (20~24) 全例砂岩であり、いく面かの擦面がある。形は一定ではなく、柱状、板状と不定形である。



第9図 免 畑 区 出 土 石 器

擦石 (25) 断面がやや三角形状を呈する偏平な河原石の長軸の一稜を擦面とした石器である。擦面には、多くの方向の擦痕がみられ狭長である。

石皿 (26) 偏平で大型の河原石の一面に擦面がみられるものである。擦石とセットにて使用されたものと考えられる。



第10図 免 掘 区 出 土 石 器

第6章 陥穴と考えられる遺構群について

研究の概略

縄文時代の狩人たちが、陥穴を使って動物を罠ったであろう事は、多くの研究者たちも漠然と考えていたことであった。

特に昭和30年代後半に至るまでの発掘調査は、限られたきわめてせまい範囲やの遺跡学・遺物学であり、為にこの種の遺構（陥穴等）の発見はほとんど報告されることもなく、顧みられなかったのが現状である。

さらに直良信夫は、積極的な狩猟の手段として「陥穴」を構築するならば、獣道など人々の生活跡である集落跡等よりはなれた地に作られ、しかもその性格上遺物等の量が非常に少ないか無い為、そういった遺跡の発見はむずかしいであろうと考えていた（直良・1963他）。

昭和40年には、長野県の蓼科高原で中学校の運動場用地を造成した所、23個の深い2m×1.5m程の規模の楕円形を呈するピット群が発見され、発掘者の宮坂氏の間に直良信夫が種々の民族的事例より陥穴ではないだろうかと推定している（宮坂他1965）。

この報告は、陥穴としての遺構について注目した最初のものであろうと考えられる。

昭和40年度代に至ると、日本全国に大規模な開発行為による緊急調査が広範囲の面積に対して行われるようになる。

これには、直良が発見しにくいであろうとした陥穴を含む遺跡の全体が発掘調査される事になり、従来知られていなかった深い楕円形等を呈するピット群の発見が関東地方より北海道中央部にかけて多くみられるようになった。

しかし、こうして発見されるピット群も、陥穴として考えられ報告される例は少なく、近世のそれと比較して規模がやや小さい等、陥穴と断定するについて異議をとなえる研究者もおり、この種のピットを陥穴であると確定するまでには至っていないようである。

本論では、これらの陥穴と考えられるピット群についてすでに分類、その配列分布状況、具体的な使用法についてまとめられた鶯ヶ丘遺跡での今村氏の論、札幌S267、268遺跡にて同種のピット群のまとめを行っている内山氏の論を中心として、関東、東北、北海道に特に多く分布する陥穴と考えられるピット群の研究の概略について、若干のまとめを行って行きたい。

I

関東地方に於いては、東京都の多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査をはじめとする大規模な緊急調査にて、やはり特異な形状のピット群が多く発見され、問題視されて来た。

横浜市の鶯ヶ丘遺跡では、発掘開始時よりこの種のピットの規模、形状、配列、分布の状況より陥穴として考え、台地全域にわたり猟場としての遺跡及びピット群の様相に克明に調査が行われ

た。

調査者の1人である今村氏は、これらの発見されたピット群について種々の考察を加えて、陥穴としての位置付けを行っている。

立地については、谷の形に左右されながらも台地平坦面では均等にばらまかれたように分布している。尾根から台地平坦面に向かって下る急な斜面でも数は少ないが存在している。ピット群は、傾斜地にては数は少ないが立地についての制約や好みがなく、どんな所にも存在するという事が示めされている。

長軸方向では、多くの場合等高線と直角方向、すなわち傾斜の方向をとるが、谷状の窪地の周辺ではその谷の方向に引かれる、といった結果が得られ、獣道に沿って作られた陥穴ではないかとの推定に有利な結果となっている点をあげている。

さらにピットの長軸方向と地形の傾斜度、地形の様相についての対比より具体的な分類を行っている。

各ピットの長軸方向と地形との関連性については、

おとし穴の方向——獣道の方向——周囲の地形

↑
↳ その一部としての地の傾斜や谷の存在

という非常に間接的なつながりの反映にすぎないと結論づけている。

ピットの埋没状態では、墳底面上にある5cm呈の黒色土の存在より、ピット上面になんらかの人為的な面が作られ、それが落ちこんだ後に柴や屑がくずれ落ち、自然に埋没していったのではないかとセクションの状態の観察より結論づけている。

これらの事実、立地、地形との関連による各ピットの長軸方向、埋没の状況より総合的に「陥穴」と結論している。

各ピット群の形状については、A～H型の8型式に分類し、A型はさらに3個に細分され、B型も同様に3個に細分されている。

A型、B型、C型の3型式は、墳底面の構築物(?)の構造の差が分類上の規準となり、D～H型については、形状をその規準としている。

A型のピットは、巾広の楕円形を呈し、墳底面に柱穴状のピットが多数あるもので中央部に集中してあるものをA1型、2ヶ所に集中するものをA2型、全面にあるものをA3型としている。

B型のピットは、A型ピットと同様の形であり、墳底面にやや大形のピットがあるものである。墳底面中央に1個あるものをA1型、2個あるものをB2型、墳底面よりさらに一段掘り込むものをB3型としている。

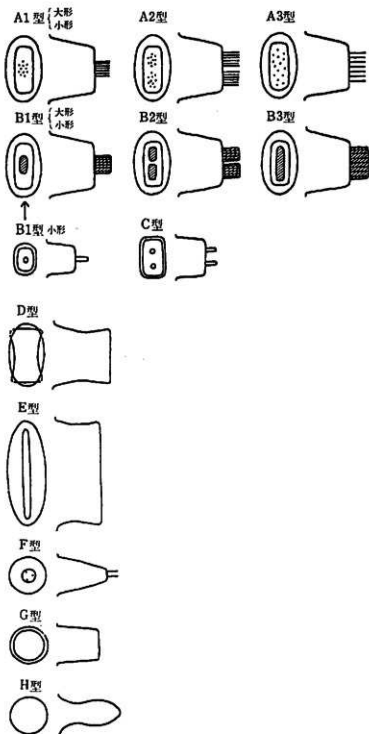
D型ピットは、楕円形ないしは隅丸方形であり巾広い墳底面を有するものである。

E型ピットは、溝状を呈するものであり東北、北海道に多く分布しているものである。

F型は、円形のプランを有し、墳底面に柱穴状小ピットが数個あるものである。

G型ピットは、円形プランを呈し筒状となるものである。

H型ピットは、円型プランで断面が袋状となるものである。



第11圖 蠶ヶ丘遺跡のビット分類 (今村他1973による)

A型ピットは、墳底面に柱状ピットが群をなし存在するもので、陥穴としては逆茂木が数本～数10本立てられていたものと考えている。

B型ピットは、墳底面に逆茂木を立てるため大きなピットを掘り、数本～数10本の逆茂木を埋め込んだものとしている。

C型ピットは、A型ピットと同様であるが1～2本の逆茂木のある例である。

D型ピットは、巾広の墳底面であり、墳底面に丸太等を格子状に組み込み、動物の足をからめ取る等の仕かけがあったのではと考えている。

年代については、遺構の周辺より出土した土器群の様相と、各ピットと炉穴との切り合い、ピットの切り合い関係より以下5点の要点を述べている。

- 1 E型はB1型より古い。
- 2 D型は炉穴より古いか同時期である。
- 3 B1型は炉穴と同時期である。
- 4 A型とB型は同時期のものであると考えるべきふしがある。
- 5 土壌の大部分は縄文早期以前のものらしい。そして、問題を多く含むとしながら、

A型

E型→D型→B型

炉穴

という編年が考えられるとしている。

さらに、これらのピットを陥穴と規定しつつ、その対象動物として猪がまず考えられるとしている。

今村氏は、さらに民族事例からの陥穴の形態についても論じている（今村・1977）。

霧ヶ丘遺跡の発掘調査時より、陥穴と考えられるピット群の発見例が増加しつつある現状ではあるが、この種のピットが陥穴とするには、その規模等近世の陥穴より小さい事などより異論も多く、世界各地の末開民族の類似例をあげる事により陥穴としての確たる証明を行おうとしている。

E型と霧ヶ丘遺跡や分類したピット群は、北海道・東北に多くみられ、その分布より対象動物は鹿と考えている。民族例では、西アフリカのPangwe族のワナがあり、溝状で巾が狭い為、動物が落ち込むと壁と壁に身体がはさまれうごけなくなる機能を述べている。

A型、B型に分類したピットは、霧ヶ丘遺跡に特徴的にみられる型で、東アフリカ、タンザニアShanbala族の陥穴と類似し、その規模は、

イノシシ用 2×1.5m 深さ 1.75m

水牛用 3.5×2m 深さ 3m

であり、3平方kmに16例の陥穴が作られていたとしている。

規模より考え、霧ヶ丘遺跡にて多くみられるこの種のピットは、猪用として作られた陥穴ではなからうかとしている。

また陥穴の分布、配列については、ブッシュマンの場合は、川岸に沿って30～40個漏る例等をあ

げ、さらに狩猟の方法として、柵を作り追い込んで陥穴に落ち巻狩、獣道に沿って掘られた陥穴列を使用し、動物が自然に落ち込むのをまつ例等をあげている。

D型としたビット群については、民族例は見当らず、墳底面が平坦で巾広となる構造は、獲物の脱出を防ぐために丸太などを組んだ仕掛があった可能性を指摘している。

また渡辺誠氏の「民俗誌の正しい認識があれば霧ヶ丘の小ビットがシン穴に間違えられることもなかろう」とする論(渡辺 1970)に、霧ヶ丘遺跡にて発見されたビット群は、後世の民俗に比較してたしかに小規模であるが、鉄製のシャベル等で比較的容場に深い穴を掘れる近世の陥穴と、石や木の粗末な道具しかないが、動物たちの習性を熟知した縄文時代の人々が必要最少限に作った陥穴と同一の时限でとらえられるかと疑問を投げかけ、さらに霧ヶ丘遺跡のビット群は、シン穴と断定したのではなく可能性の問題として指摘したもので、シン穴でないとするならば、この種のビット群の用途はいったいなんであろうかと逆に問いかけを行っている。

II

北海道においては、昭和30年頃から藤本英夫によって始められた日高各地の発掘調査の先駆けとなった静内町御殿山遺跡に於て、積石を有する縄文時代後期の土壌墓群中に、深く溝状を呈する特異な形状のビット群が発見されていた。しかし数多く出されている略報の中では、特異な形状の土壌墓であろうとして、特に注意ははらわれてはいなかった(河野、藤本 1953他)。

結局、北海道においても、陥穴と考えられるビット群の発見例は比較的古くからあるようであるが、積極的にその追求もなされず放置されていたわけであった。

昭和42年に至って、函館空港の拡張計画より函館空港第1地点遺跡の発掘調査が行われ、多くの深い溝状を呈するビットが発見され、調査者はその形状、分布の状況より動物を猟る為のGトラップ(重カワナ)の可能性が大きいと考えその名称をトラップビットと呼び一般的には略してTビットと称していた。

しかし時期的には明確にされてなく、近くに館跡がある事より中世の可能性もある事が指適されていた。

翌年には、同空港の地4点遺跡が発掘調査され、陥穴と考えられる溝状の深いいわゆるTビットが、縄文時代前期の集落跡とともに56個発見された。

これらのビット群について個々の説明はなされていないが、略報ではまとめとして重要な3点を述べている。

- ①Tビットは、尾根より小高い地域に、等高線に平行するように配列していた。
- ②Tビットに共伴する遺物は皆無で、その用途も不明である。
- ③Tビットの年代は、集落の年代(縄文時代前期)よりも新しい。

以上の3点の事実をあげている(森田・1967)。

これらの函館空港第4地点遺跡の発掘調査に於いてまとめられた事実は、北海道でその後発見されはじめられた同種のビット群を考えるうえにおいて重要な視点を与えるものとなって行く。

昭和47年には、同じく函館市西栢梗で大規模な緊急調査が行われ、B₁、B₂、E₁の3遺跡にて多くの深い溝状を呈するいわゆるTピットが発見された。これらのピットが沢(谷)に向け一直線上に並列して配列する事が解った以外、函館空港第4地点遺跡の調査にて解った事実以外進展はなかった(千代、加藤他1968)。

以後道南、道央を中心として数は少ないが深く溝状のTピットが発見されるようになる。

昭和48年に行われた道南の松前町江良の大津B遺跡では、函館空港遺跡、西栢梗遺跡群にて示られた、深く溝状を呈するTピット群にまじって、同様に深くTピットと同じ埋没状態を示めすマニ形の巾広い開壕部と巾広い墳底面を有する別形状のピットが発見された。報告者は、2型式に分類し溝状のものをTピット、巾広のものをマニ状ピットとしている。ここでも函館空港第4地点遺跡にて解った事実以外進展すべき新事実は解っていない(斎藤 1974)。

昭和49年・50年の2ヶ年にわたって、札幌市S153遺跡が発掘調査が行われた。遺跡は、縄文時代早期～晩期、統縄文～接文時代に至る700個以上の土墳墓群が1万平方mの範囲に見え、これらに混って深い溝状を呈するピット群と巾広の楕円形状を呈し墳底面に柱穴状の小ピットのある2型式のピット群が31個発見された。溝状を呈するピット群をA型、巾広で墳底面に柱穴状小ピットがあるピット群をB型と2型式に分類し、各型式ごとのピットは数個並列して沢(谷)に直交、あるいは並列して配列する事が解った。

報告では、先きに調査されている横浜市の霧ヶ丘遺跡で陥穴でないであろうとの論を尊重し、陥穴説をもっとも妥当なものとしている。

さらに、年代については、縄文時代晩期(645号ピット)、統縄文時代(91号ピット)の土墳墓と切り合って構築されるピットが3例ありそれより古い事実は指摘されているが、明確な年代については解っていない(加藤 1976)。

昭和48年・49年には、同じく札幌市のS267・268遺跡が発掘調査され、これらの陥穴と考えられるピット群が60個発見されている。

遺跡からは、縄文時代中期の整穴住居跡が2軒と縄文時代晩期の土墳が2個発見され他にみるべき遺構が発見されていない。しかし陥穴と考えられるピット群が多い為、猟場としての遺跡の位置付けより、ピット群の細分、配列状況等、取道のかねあい等より究明に調査が行われた。

ピットの細分、埋没状況、配列、主たる用途等について、内山氏が詳細に論じている。

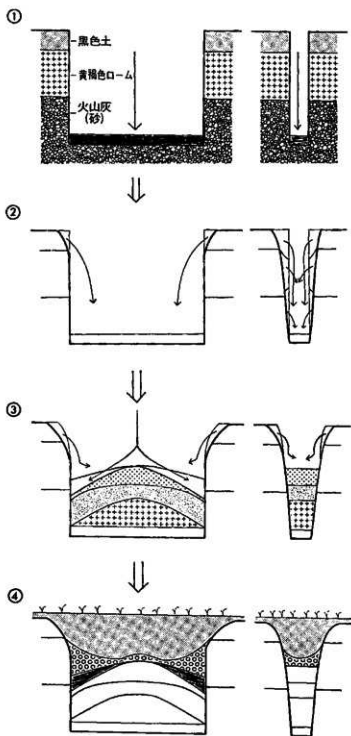
まずピットの埋没状況の詳細な観察より壁面が風雨によって永い時間をかけて崩落し埋没して行った過程を記録し、あくまで放置され自然に埋没して行った事実を、模式図(第12図)、最近の埋没例等をあげ説明している。

形状によるピット分類では、開壕部の大きさ、形、墳底面の大きさ及び構造によりA型、B型、C型、D型に分類し、さらにA型をI～III、C型をI、IIと細分している。

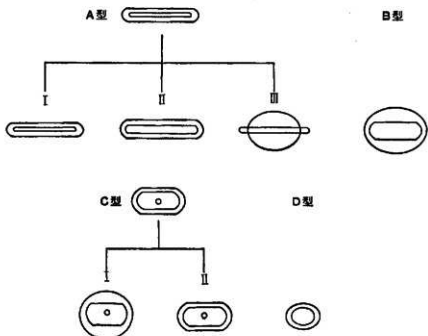
A型は、溝状を呈し短軸の断面形が、クサビ形にちかくなるものである。

A型 I 類 非常に細い溝状を呈するもの。

A型 II 類 墳底部の幅がA I型に比し若干広くなり、開壕部も長大となり3mをこえるものも



第12図 ピット埋没模式図 (内山1977による)



第13図 S267・286遺跡のビット分類 (内山1977による)

ある。

A型 III類 I・II類の中間の規模をもつグループ。

B型は、A型より全体的に巾広くなるタイプである。

C型は、坑底面の形は、隅丸方形を呈し坑底面中央に柱状小ビットを有することが特徴となるグループである。

C型 I類 開坑部の平面形が楕円形、長楕円形を呈するもの。

C型 II類 開坑部及び坑底部の平面形が共に隅丸長方形をなす型であり、配列の状況よりみれば、I、II類とも同列中にみられる。

D型は、直径1m内外の円形ないしは楕円形を呈するもので、断面は筒状に近くなるものである。

以上に分類されたビット群は、各型式ごとに数個～十数個1組みとなり、第1～第14列の列状に沢(谷)に平行、直交しながら配列し分布していた事実があるとしている。

さらに、先にも記したが、S153遺跡で発見された31個のビット群も同様に型式設定し、第1～第8列のビット群の配列分布が考えられるとしている。

ビット群の使用用途として、霧ヶ丘遺跡にて今村氏が論じたごとく、やはり動物を猟る為の「陥穴」との位置付けより、その対象動物がばくぜんと鹿ではなからうかと言われて来たのであるが、ここでは、動物学の助言を得て、明確に鹿と断定し、冬期間に積雪をさけ集まる鹿を対象としたものであり、日当りの良好な、雪が少なく草、笹等が露出する南西向きの上地上に鹿は集まり、

この場所の条件と、陥穴群の存在する地域が一致している点より、冬期間の早い時期に、開墾部に偽装など行わず、むき出しのまま使用され、鹿を対象としたものである事等新たな試を述べている。さらにビット群の各配列布の状況は、沢(谷)との関連よりの獣道に沿っている可能性が非常に高いと具体的に説明している。

さて、最近函館では、昭和49年来より行われていた函館空港遺跡群の発掘調査の報告がなされている(千代他 1977)。

同空港第4地点遺跡からは、108個のTビットと称する深い溝状を呈するビット群が発見されており、さらに中野遺跡からは、75個発見されている。

ビット群は、A、B、C型の3型式に分類され、長軸、短軸の断面形、及びネズミ穴(モグラ穴)のある壁を有するもの、墳床面に柱穴状ビットの存在するもの等をさらに細分している。

長軸、短軸断面形を分類の準としてあるが、先きにも記したS267・268遺跡での調査結果では、ビットが自然に埋没する過程で壁面が崩落するのであるが、壁がえぐれオーバーハンクしていく様子は、ビットの斜面に対する立地の関係で雨の流れ込み、口当り等で大きく変化する事が解っている。

為に陥穴としての機能を真先に考えるならば、無意味と思える。さらにビットの壁面にネズミ・モグラ等の小動物による穴が存在するものと、墳床面に柱穴状の小ビットが存在するもの等も分類の対象としているが、前者はいわば自然の所産である点は明らかであり、後者は墳底部に逆茂木等を建てていた可能性も考えられる人為的な所産であり、分類の対象とするには疑問視せざるを得ない。

少なくとも、現時点においては霧ヶ丘遺跡等の発掘調査によって得られた種々の結果がほとんど無視され、2～3歩後退したといえようか。

先にも記しているS267・268遺跡の存在する台地上には、今回報告しているS411遺跡も含む、8遺跡が存在し、先年その全てを発掘調査し、長さ3km程にわたり沢谷いに約80個の陥穴と考えられるビットが発見されている。沢(谷)に面する立地とビット群の配列分布の状況は、まさにかつての狩猟場の様子を彷彿させよう。

III

最近、多くの概説書が出版され、縮文時代の狩猟方法として弓矢による物等とともに、陥穴、ワナによる狩猟がある例として、霧ヶ丘遺跡の群のビット分布配列状況が図示される例が多くなって来ている(佐原真、坪井清足 1973『海の幸・山の幸』『日本生活文化史』1、小林達夫 1976『縄文土器』『日本原始美術大系』等がある)。

渡辺誠氏による、霧ヶ丘遺跡のビットの規模は小さく、近世等の現在する陥穴(猪用)とは様相がかなり差がみられるので陥穴としては疑問であるとの論(渡辺 1976)も充分に検討すべき問題ではあるが、現時点では、この種のビットは陥穴であろうとする説に総体的にはなっていないようである。

(付) 陥穴と考えられるピット群の 発見された遺跡地名表

本地名表は、知見される限りの文献に掲載されたものを編集したが、現在の発掘件数と毎年々出版される莫大な数の報告書すべてに目を通すことは不加能に近く、さらに編集に費やした時間もきわめて限定された短い時間であった為、北海道、青森県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県のごく一部の遺跡より記していない不完全なものとなってしまったことを御祈りしておきたい。

概要中にピット群を幾型式かに分類してあるがこれは下記に概要と記し第14図に示めた分類によるものである。

また末尾に日本各地の陥穴と考えられる遺構群の図を載せた、合わせて参考にしていただきたい。

陥穴の分類について

ピット群の分類は、今村(今村 1975)、内山(内山 1977)によりその詳細が発表されている。今村による分類は、関東地方にて多く発見されている直径1.5m内外の隅丸方形、楕円形のプランを呈すものが主となり、内山による分類は、北海道・東北に多く分布する巾の狭い溝状を呈するピット群の分類が主となっている。

全国的に発見されている、ピット群を概観した場合両氏の分類では、不足点が出現してくる。

本書に於ける地名表では、陥穴の機能の差を重視し、新たに分類した。

A型、巾の狭い溝状を呈するもので、動物の身体が壁に挟まりその行動を阻止するものであろうと考えた。さらに巾の狭い墳底面に柱穴状小ピットのある例もあり、逆茂木等がさらに立てられていたと想像されるものを含め、全長が4mをこえる長大なもの等3型式に細分した。

B型、隅丸方形・楕円形のプランを呈し墳底面が巾広となる、直径1.5m内外の小型のピット群である。墳底面の構造にて4型式に細分した。

B I 型：墳底面中央に1個柱穴状小ピットのあるもので、逆茂木が1本立てられていたと想像されるものである。

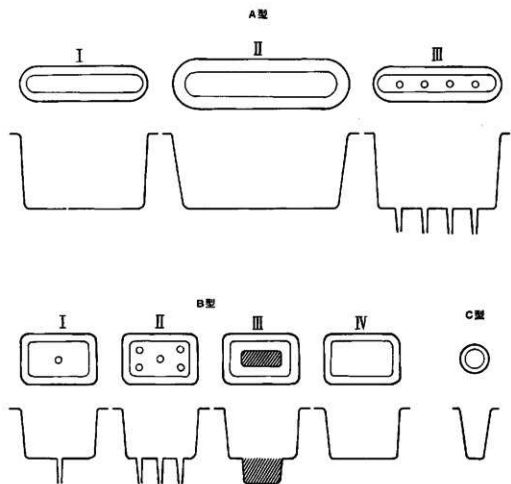
B II 型：墳底面に数本から致10本の柱穴状小ピットがあるもので、逆茂木、動物が落ち込んだ時にある種の構築物があり足が地に着かないようする等のものがあつたと想像されるものである。

B III 型：基本的には、II型と同種の構築物があつたと考えられるものだが、墳底面をさらに掘り込み柱等を生け込んだと解されるものである。

B IV 型：墳底面は平坦で、小ピット等一切検出されないもので、使用方法としては丸太等を格子状に組み動物の足の動きを防じたものと想像されるピットである。

C型、陥穴としての機能を考えるならばためらいを感じるが、各地で発見されている直径1m内

外の深い円形のビットである。



第14図 陥穴の型態分類

第1表 陥穴と考えられるビット群の発見された遺跡地名表

遺 跡 名	所 在 地	文 献
西 合 遺 跡	北海道浦河郡浦河町西合	④
<p>概要 溝状ビットと称する、A-I型のビットが1個のみ検出されている。海に面した舌状台地上に遺跡は立地しており、ビットの長軸は、北西-南東方向を向く。遺跡は縄文時代早期～前期の遺物が発見されている。</p> <p>ビットの立地は、沢、海、地形等との関連については、略図程度の地形及び遺構配置図しか図示されず不明の点が多い。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
白 泉 遺 跡	北海道浦河郡浦河町白泉	④
<p>概要 4個のA-I型のビットが報告されている。遺跡は、眼下に太平洋を見おろす舌状台地上にあり、ビットは、北東-南西の長軸方向を向く1個のをぞいて他は、南-北の長軸方向（山-海）を有している。小発掘の為配列等は明確にされていない。</p> <p>尚、遺跡は、縄文時代晩期～統縄文時代の土墳墓が検出されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
御 殿 山 遺 跡	北海道静内郡静内町	②⑤⑥
<p>概要 縄文時代後期の積石をもつ土墳墓群の中に溝状遺構とされ特異な形で、遺物のない墓として報告されている。</p> <p>全例で十数個あるといわれているが、A-I型に類するものが最も多いという。</p> <p>尚、詳細な報告がなされていない現在としては、推定のいきを出ない。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
発 舞 台 地 遺 跡	北海道日高郡三石町発舞	④
<p>概要 A-I型と考えられるビットがミゾ1～ミゾ11として11個検出されているが、内1個は2個のビットが重複していると思われ、12個ある。図より見ると、いく例かの配列があると考えられる。遺跡は、海岸線より約1km程の内陸にあり、標高30m内外の小丘上であり、前面には発舞川が流れている。</p> <p>尚、遺跡からは縄文時代の陥穴住居跡が1軒と統縄文時代の土墳墓が9個発見されている。しかし、ミゾとされたビット群との関連については、一切ふれていない。</p>		

遺 跡 名	所 在 地	文 献
美 沢 3 遺 跡	北海道苫小牧市美沢	㊦
<p>概要 B-IV型のピットが1個発見されている。遺跡の立地は、南から北に向け傾斜する斜面上にあり、ピットは遺跡の低くなる部位にある。標高8mの等高線に接して、長軸をこの等高線に直交する南—北方向に向けている。</p> <p>遺跡からは、本種のピットとともに、縄文時代後期の竪穴住居跡が1軒得られている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
美 沢 1 遺 跡	北海道苫小牧市美沢	㊦
<p>概要 3個のピットが発見され、全例A-I型に類する。</p> <p>3個のピットは、8m～10m程の間隔をとって並列しており、舌状の台地の北西面の標高7.5mの等高線上にある。個々のピットの長軸方向は斜面に対して直交する方向（北西—南東）をとっている。</p> <p>尚、本遺跡は、縄文時代、中、後期の竪穴住居跡と、土壌墓が多数発見されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
美 々 4 遺 跡	北海道千歳市美々	㊦
<p>概要 A-I型に類するピット2個と、A-II型に類するやや大型のピットが2個、発見されている。</p> <p>遺跡は、北西部が高く南東へ傾斜する斜面であり、A-II型の2個のピットは、長軸方向を斜面の傾斜方向と同じ方向に向け、10m程はなれ対になって配列し、A-I型の2個のピットは、長軸方向を斜面の傾斜方向に直交する方向をもち約20m程の間隔を有し、並列しながら、斜面の傾斜方向にわけ列をなしている。</p> <p>尚、遺跡は、縄文時代晩期の土壌墓が多数検出されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
上 島 松 遺 跡	北海道恵庭市上島松	㊦
<p>概要 A-I型に類するピットが1個、縄文時代の土壌墓と切り合って発見されている。土壌墓の構築年代が新しく考えられている。プランは、長楕円形で溝状を呈する規模は、長径3.2m、短径50cm、深さは、セクション図を見ると、城底面まで発掘され、</p>		

ているとは思われず、記録図で60cm内外である。

本ビットの発見された遺跡は、前面にある川より比高15m程のなだらかな台地の上
にあり、本ビットは、長軸をはぼ南北にとり、斜面に直交して存在しているようであ
る。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
北広島団地第1遺跡	北海道札幌郡広島町北広島	㊸

概要 直径4～5m内外の楕円形のすり鉢状ビットの東側に長さ3.2m、幅60cm、深さ
80cmの溝状ビットの付属している。報告者は、ビット17として大型で楕円状のすり
鉢形ビットと溝状のビットを1個のビットとして報告しているが、溝状を占めるビ
ットは、大型で楕円形のすり鉢状ビットとは完全に独立したA-I型に分類されるであ
ろうビットである。

ビットは、標高22.5mの位置にあり、その長軸示向度と同にとっている。

尚、本ビット中から遺物は全く検出されておらず、時期は不明である。

本遺跡からは、縄文時代早期の土壌、縄文時代後期の竪穴住居跡が各1個発見され
ている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
大曲 B 遺 跡	北海道札幌郡広島町大曲	㊹

概要 北に向け突出した標高90m内外の舌状台地の付け根部分が遺跡であり、A-I型ビ
ットが2個、B-II型ビットが5個検出されている。A-I型ビットは、2個対になり
東に向かって傾斜する傾斜面にあり、斜面方向と直交するように列をなす。

B-II型ビットは、4個が対になり西に向かって傾斜する面にあり、その配列状況は
舌状台地の西面から尾根に沿って行くライン上に1列分布する。

遺跡からは、縄文時代晩期の竪穴住居跡が得られており遺物も、竪穴を中心として
若干出土している。本類ビットからは、一切遺物は検出されていない。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
大曲 C 遺 跡	北海道札幌郡広島町大曲	㊺

概要 大曲B遺跡とは、沢をはさんで東側にある。やはり北に向け突出した標高90m内外
の舌状台地に遺跡は立地している。A-I型ビットが1個検出されている。舌状台地
の南東向斜面のかなり下位にあり、その長軸方向は、舌状台地の尾根のラインと同一
方向となっている。

遺跡からは、縄文時代中期の若干の遺物が得られているという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
T 2 1 0 遺 跡	北海道札幌市豊平区西岡	⑦
<p>概要 溝状遺構と称するA-I型のピットが、縄文時代早・中・晩期の土壌墓群とともに3個検出されている。遺跡は、標高140mから、130mの北西-南東に傾斜する斜面上に立地し、本類のピットは全例遺跡の北西側に位置している（標高136m～137m）。さらに、これら3個のピットは、台地の先端に向け3個並列して一直線上にならんでおり、その長軸方向もほぼ南-北方向を向っている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 2 6 9 遺 跡	北海道札幌市白石区大谷地	⑧
<p>概要 小さな沢を中心として馬蹄形状の台地に立地した遺跡であり、標高27mの等高線に沿って2個のA-I型ピットが検出されている。両ピットは南-北に長軸方向を有する斜面の方向に直交するものと、斜面の方向と同一方向の長軸方向を有している。本遺跡からは、この種のピットのみしか遺構が得られず、遺物も、ごく少量の縄文時代中期の土器、石器等が得られたのみである。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 4 1 1 遺 跡	北海道札幌市白石区大谷地	本 書
<p>概要 A-I型ピットが5個とB-I型ピットが1個、総計6個のピットが得られている。遺跡の立地は、沢に向って突出した舌状台地（標高38m内外）にありA-I型ピットは、南-北に近い方向の長軸方向を有し、10数mづつ間隔を有しながら並列し、舌状台地の南面に先端から付け根に向け1列をなしている。さらにB-I型ピットはこの舌状台地の向きとはほぼ同一の長軸方向を有し、1個しか発見されていないがすでに削平されている部分がありこの方向に舌状台地に直交するような形で列をなしていたと思われる。</p> <p>本遺跡からは、遺構はこの種のピットのみしか得られず遺物はごく少量の縄文時代早期のものが得られたのみである。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 2 6 7・2 6 8 遺 跡	北海道札幌市白石区大谷地	⑨
<p>概要 沢沿いの南西向き標高28m内外の台地上に遺跡は立地し、本種のピット群が長さ300m、幅90mの範囲にわたり60個分布している。その内わけは、A-I型28個、A-II</p>		

型2個, B-I型16個, B-II型2個, B-IV型11個, C型1個である。

これらのピット群は、タイプ別に数m～十数mはなれ並列しながら列をなしている。沢沿いに十数個のピットが列をなす例、さらに台地から沢に向け数個のピットが列をなす等、14通りの配列がみられる。

尚、本遺跡は縄文時代中期の竪穴住居跡が2軒と縄文時代晩期の上墳が2個発見され、遺物は、縄文時代早期から統縄文時代におたる土器・石器等が多く得られている。本類ピット中にも若干の遺物が検出されているが、時期的な所産など決定される資料となっていない。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 265 遺 跡	北海道札幌市白石区大谷地	⑤

概要 南西向きの高さ30m内外の台地上であり、A-I型に類するピットが10個検出されている。ピットの群は、4グループ程に分類される。台地の北西辺に数個あり等高線に直交する長軸方向をもつピット群、北向きに突出した等高線を中心として突出した方向に向って並列するグループ、これらと若干離れ北西向きになる台地上に並列して沢に向け直交するグループ等がある。しかし個々のピットはその長軸方向は一致したものではない。

尚、本遺跡は、縄文時代中期・晩期の竪穴住居跡、土墳墓等が数個づつ得られている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
S262・263 遺 跡	北海道札幌市白石区大谷地	⑤

概要 西面に二里川という小河川を見おろす南向きのゆるやかな傾斜面に遺跡は立地している。

A-I型ピットが12個、それぞれ並列して西面に対してやや斜行しながら数列分布している。

長軸方向は、ほとんど南西—北東方向を向くが例外的に南東—北西方向を向くものが2列ほどある。

尚、本遺跡、S265、S267・268、S269遺跡は、一連の台地上にありこの種のピットは、約3.5kmの範囲にわたり台地の側辺部に84個程分布してある。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 239 遺 跡	北海道札幌市白石区上野幌	⑥

概要 B-I型、B-IV型が各1個づつ2個のピットのみ検出されている。

2個は、数十m離れているがほぼ同一の方向を向き（南—北）斜面の方向に平行してある。2個のピットの長軸方向は、沢の方向に向いている。報告者は、消極的な方法ではあるが動物を捕るための陥穴として考えている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 2 4 2 遺 跡	北海道札幌市白石区小野幌	㉑

概要 A-I型のピットが3個検出されている。内2個は、28mの等高線に直交しており、それぞれの長軸の方向は斜面の方向と同一である。1個は、28mの等高線と、斜面方向に対して平行してある。

遺跡の、縄文時代早期と中期の土器、石器が出土しているが、この種のピット以外の遺構は発見されていない。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
S 1 5 3 遺 跡	北海道札幌市白石区厚別小野幌	㉒

概要 縄文時代早期へ撥文時代にわたる約800個の上墳墓群に混ってA-I型に類するピット21個、B-I型に類するピット9個の合計30個が発見されている。

A-I型のピット群に、次に直交する列をなすグループと、南北の方向に列をなす4つのグループの計5グループに配列により分類される。

B-I型のピット群は、南北の方向に列をなす2列のグループと沢から大きくはなれるが、沢の方へ向って列をなす1列のグループの計3グループの配列がみられる。ピット群は、標高28m程の台地上にあり台地の中央には、幅50m程の沢がある。沢を中心として馬蹄形に分布している。内1個のピットは縄文時代恵山期の土墳墓によって切られてあり、少なくとも縄文時代より古い時代の所産であることが明らかになっている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
森 越 遺 跡	北海道上磯郡知内町森越	㉓

概要 A-I型に類するピットが2個それぞれ、縄文時代中期の竪穴住居跡の床面を切って発見されている。

遺跡の標高は18m内外の台地上であり、両ピットは、その長軸方向をほぼ南北にとり、対になって10数mはなれ、並列してあったと思われる。さらに斜面に対しては平行してある。遺物は無く時期的な判別は出来ないが住居跡との切り合いより、縄文時代中期以降の所産であり、17基発見された縄文時代中期の竪穴住居跡群とは、関

連が無いであろうとしている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
大 津 B 遺 跡	北海道松前郡松前町江良	㉔

概要 A-I型に類するビットが4個、B-IV型に類するビットが3個発見されている。A-I型をTビット、B-IV型をマニ状ビットと分類している。

A-I型に類するビットは、全例長軸を東西方向に向けており、ゆるやかな斜面に対して、ほぼ平行してあるという。

B-IV型のビットは、1個のみA-I型と同一の長軸方向を示すというが他は、若干ずれているとのことである。

これらのビット中からは、年代決定にたる遺物は得られていないが、埋土には、縄文前期・後期の土器が若干含まれていたという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
小 浜 遺 跡	北海道松前郡松前町	㉕

概要 A-I型のビットが1個発見されている。

長軸方向は北東—南西をむく。遺構と地形との関連を示す配置図が不備の為、斜面、沢等に関連するビットの位置等不明の点が多い。

尚、ビット内からは何ら遺物が発見されていないという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
元 和 B 遺 跡第1地点	北海道松山郡乙部町元和	㉖

概要 Tビット状の落込みがみられたが、報告者は、大為的な確証はないとしている。

尚、実測図、地形との関連図が無いため詳細は不明である。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
元 和 B 遺 跡第3地点	北海道松山郡乙部町元和	㉖

概要 A-I型のビットが2個検出されている。遺跡の立地は、標高65m～45m程の傾斜地であり2個のビットはそのやや下位の標高50m程のところ2m程の間を並んでおり、その長軸は斜面の方向と同一（南—北）を向いている。ビット内からは一切の遺物は得られていない。

遺跡は、縄文時代早期、中期、後期の竪穴住居跡が数軒と土壌群が発見されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
元和B遺跡第5地点	北海道松山郡乙部町元和	⑨
<p>概要 A-I型のピットが遺跡の中心よりかなりはずれた所で1個のみ検出されている。遺跡は、標高50～40m程のゆるやかな東一西へ傾斜する斜面であり、本ピットは、ほぼ中位の46m程の所に位置している。長軸方向は、傾斜の方向と一致している。</p> <p>尚、本遺跡からは、縄文早期～後期に至る竪穴住居跡、土壌が数多く発見されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
西 桔 梗 B1 遺 跡	北海道函館市西桔梗	⑩
<p>概要 A-I型に類するピットが5個のみ得られている。</p> <p>長軸の向き、地形的（斜面の方向、沢の方向）にも散発的に分布していて、グループ（配列のグループ）としてとらえきれない面が多い。斜面に対しても直交するタイプ、斜行するタイプ、並行するタイプと乱雑である。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
西 桔 梗 B2 遺 跡	北海道函館市西桔梗	⑩
<p>概要 統縄文時代、恵山期の土壌墓が発見された遺跡であり、特殊遺構Aとして、A-I型に分類されるピットが6個検出されている。</p> <p>これらのピット群は、斜面と直交した配列もっており、個々のピットは斜面の方向と直交した長軸方向（やや北西―南東）をとるものが多いがそうでないピットもみられる。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
西 桔 梗 E1 遺 跡	北海道函館市西桔梗	⑩
<p>概要 縄文時代中期の竪穴住居跡4軒と、統縄文期の土壌墓が1個得られている遺跡で、これらにまじってA-I型に類するピットが5個発見されている。</p> <p>遺跡は、舌状台地にあるため、5個のピットは、舌状台地の尾根の線に沿って10数mずつはなれ、並列して1列の配列で分布している。</p> <p>各々のピットの長軸方向は、東一西である。</p>		

遺 跡 名	所 在 地	文 献
中野 B 遺跡	北海道函館市中野町	㊦
<p>概要 A遺跡とは沢をへだてた北向きのゆるやかと傾斜を有する標高45m程の台地上にある。Tピットの称される本類のピットは22個縄文時代早期の竪穴住居跡群とともに検出されている。全てA-I型に属する、やはり、傾斜の方向に対して直交する長軸方向を有しながら沢に向け、いく列かの列状をなしている。</p> <p>尚、住居跡群との関連は、あきらかにピットの方が新しく直接的な関連性はないと報告されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
中野 A 遺跡	北海道函館市中野町	㊦
<p>概要 函館空港第4遺跡とは300m程はなれた、南東に向けゆるやかに傾斜する標高45m前後の台地上にある。</p> <p>Tピットと称される本類のピットは、全例A-I型に属するもので75個検出されている。やはり、傾斜する方向に沿って傾斜する方向とは、直交する長軸方向を有しながらいく列かの配列がある。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
函館空港遺跡第4地点	北海道函館市中野町	㊦
<p>概要 南向きの、標高40m前後のゆるやかな傾斜を有する台地上に遺跡は立地し、A-I型に類するピットが108個と大量に発見されている。ピットの大部分は、東一西の長軸方向を有し、傾斜する方向に向って十数列の配列があり、さらに等高線のラインに沿って、さらにいく列かの配列がある。報告者は、これらのピットをその形状により分類しているがその基準は自然に埋没した埋没状況であり、本来の意味をなしてはいない。</p> <p>遺跡からは、縄文時代前期を主とする竪穴住居跡が台地の奥に多く検出されている。これらとピットとの切り合い関係は、やはり、ピットの方が新しいとしている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
函館空港第4地点遺跡 (昭和42年度)	北海道函館市中野町	㊦ ㊧
<p>概要 沢に面する南東向きのゆるやかな傾斜のある台地上に遺跡は立地し、60軒以上の竪穴住居跡と56個のTピットと称された本類のピットが発見されている。個々のピット</p>		

の図が示されていないため詳細は不明であるがほとんどA-I型に分類されるであろうと思われる。各ピットの長軸方向は、沢に直交あるいは平行して並ぶ幾列かの配列の状況によってさまざまな方向を向いている。

尚、本類のピットと縄文時代前期に属する壑穴層跡との切り合い関係から、明らかに本類ピットの構築年代の方が新しいとされている。さらにこれらのピットは、尾根より小高い地域に分布し等高線に平行するように配列している傾向があるという。

ピット内から遺物は皆無で、ピットの用途は不明であったとしている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
千 歳 遺 跡	青森県上北郡六ヶ所村	⑬

概要 溝状ピット、長楕円状壑穴遺構、柱状ピットと称して、A-I型ピットが11個、C型に類するピットが1個計2個のこの種のピットが検出されている。遺跡は3地区に分離しているが、1、2地区は同一に考えられる。各地区で、この種のピットが発見されている。遺跡の立地が北向きのゆるやかな斜面であり、ピットもその大部分が、斜面の方向と同一の、南一北の長軸方向をとっている。2～3個のA-I型ピットは、2～30mの間隔をもって並列して数列のグループを作り、列は斜面の方向と一致するもの、斜面の方向と直交するものの2通りあるようである。また、細かな地形の変化（沢、若干の高低差）によっても、その列の方向に若干のずれがあるようである。

本遺跡は、縄文時代早期の遺物が多量に発見されている。さらに風倒木痕？かと考えられる不定形のピット群も多くみられている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
発 茶 沢 遺 跡 (3)	青森県上北郡六ヶ所村	⑭

概要 溝状遺構としてA-I型のピットが4個報告されている。2個づつ数10mはなれ並列して対をなす感じである。個々のピットの長軸方向は、南東—北西をなし、各グループの配列状況は、その列が南—北方向にあるものと北東—南西方向に並ぶものの2方向があるようである。

地形的な立地状況は、試掘調査の概報である事より詳細ではないが、これらのピット群は、標高17m程の台地上に分布してある。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
新 納 屋 遺 跡	青森県上北郡六ヶ所村	⑮

概要 溝状ピットと称される、A-I型のピットが3個報告されている。試掘調査の為、全例未完掘であり詳細は不明である。

尚、3個のピットは、その長軸は北西—南東、東西、南—北とそれぞれバラバラの方向を向いている。配列は、3個のピットがほぼ一直線上に並列に近く沢の方向にむかって列をなしているようである。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
発 茶 沢 (2) 遺 跡	青森県上北郡六ヶ所村	⑤

概要 1個のA-I型ピット1個のB-I型ピットが検出されている。
 報告者は、小堀穴状遺構としてその詳細を報じているが、試掘の為、発掘の面積が狭く未発掘のピットもあり、その配列の状況等不明の点が多い。
 遺跡の立地は、標高25～6mの平沢な台地上にあり、発見されたピットは、この台地上のほぼ中央に2～30mはなれ並列してあるようである。ピットの長軸方向は北西—南東方向であり、ピットが並ぶ列は、ほぼ南—北の方向にある。
 尚、遺跡からは、この種のピットの他に古墳時代の竪穴住居跡が2軒発見されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
古 街 道 長 根 遺 跡	青森県三戸郡五戸町	③

概要 2個の溝状ピットと称する、A-I型のピットが報告されている。
 2個のピットは、3m程はなれて存在し、それぞれ長軸方向を南—北、東—南へとその方向を異としている。その立地は、南東が高く徐々に北西へと下る斜面上の台地のほぼ中位の約95m内外の高さに位置しているピット内より遺物等は発見されていない。
 遺跡からは、縄文時代早期の土壌が数個発見され、他に縄文中、後、晩期の土器が多く得られている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
久 広 遺 跡	山形県北山郡大石町大字田沢	⑥

概要 風刺木痕と思われる不定形の大型のピットに接してA-I型に類するピットが、1個発見されている。遺跡は舌状に張り出した台地上にあり、ピットは、長軸方向をほぼ南—北に向きゆるやかな傾斜に対し平行するような形で存在する。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
下 郷 遺 跡	群馬県高崎市八幡町	㊸
<p>概要 A-I型?かと思われるピットが写真のみ報告されている。記述では、風刻木痕と思われるピットという事で10数個のピットと同一に記されるため詳細は不明である。</p> <p>長軸方向は、ほぼ南—西方向をとる。</p> <p>尚、遺跡からは、弥生時代の方形周溝墓が数個検出されている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
坂 東 山 遺 跡 B 地点	埼玉県入間市大字小谷田	㊹
<p>概要 総計16個の長楕円形土壇と称するA-I型ピットが得られている。</p> <p>遺跡は標高116m程の台地上にあり、この台地は、東から西へゆるやかに傾斜し、大きな舌状をなす。ピットは数個が1単位となり数mづつ間隔を有して並列して列をなし、その列は、舌状台地を横断するような列をなすグループ、縦断するような列をなすグループと、大きく4～5の方向をもったグループがある。</p> <p>尚、本遺跡よりは、この類のピットの他に、敷石をもった住居跡1軒と多くの土壇が発見されている。しかしピットとの関連は無いという。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
一 ノ 作 遺 跡	千葉県印旛郡印西町草深	㊺
<p>概要 5個のA-I型に類するピットが報告されている。遺跡の立地は、南—北の方向の幅の狭い舌状台地の尾根上にあり、ピットは、その長軸方向をほぼ東—西に向け、尾根の中心線上に数10mづつ間隔をおいて並列し、1列の分布をしている。</p> <p>遺跡からは、縄文前期～後期の竪穴住居跡が9軒尾根上に発見され、ピットのうち3個は、これらの竪穴住居跡と切り合い関係にあるが、その新旧関係については、明らかにされていない。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
船 尾 白 幡 遺 跡	千葉県印旛郡印西町船尾白幡	㊻
<p>概要 B-IV型のピットが1個、弥生時代の竪穴住居跡に接して発見されている。ピットの方が古い時期の所産と報告者はいっている。</p> <p>遺跡は、標高26m程の舌状台地上に立地し、本ピットは舌状台地の付根部分にあり、</p>		

長軸方向を東一西に向け南西—北東へ傾斜する面に対しほぼ同一の方向を向いている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
芳 賀 輪 遺 跡	千葉県千葉市宮野木町	①

概要 B-I型、B-IV型に分類されるビッドが各1個発見されている。
 両者とも長径1m内外、短径80cm内外、深さ約80cmの規模を有し、楕円形状を呈している。長軸は、両ビッドともほぼ南—北方向を向けている。これらのビッドは、標高約46m程の平坦な地に立地している。
 ビッド中より遺物は全く検出されていないが、付近からは、縄文時代中期の土器が少量得られたという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
上ノ台遺跡C地区	千葉県千葉市幕張町	②

概要 南西部の突出した舌状台地が遺跡であり、B-IV型のビッドが1個陥穴として報告されている。このビッドは、長軸方向を南—北に向け台地の中央部に位置している。
 本遺跡からは、他の遺構として焼石炉、ビッドが若干出土している。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
上ノ台遺跡D地区	千葉県千葉市幕張町	②

概要 総計20個のこの種のビッドが検出されたというが16個のみその概要が報告されている。報告されたビッド群では、A-I型に類するものが8個、B-IV又はB-I型に類するビッドが8個と理解される。遺跡の立地は東から西へ若干下る傾斜地にあり、この傾斜の方向に直交するように数個が数10mずつ並列しているようである。尚、形状より報文ではI～III類に分類し、その中でさらに細分する等してこの種のビッドの形態を論じている。
 本遺跡は、古墳時代の竪穴住居跡を多数発見された集落遺跡である。この種のビッドは縄文時代のいずれかの所産であるとし、古墳時代の集落跡とは直接関連のない事が明らかとされている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
中野 僧 御 堂 遺 跡	千葉県千葉市中野地区	③

概要 B-Iビッドが1個、B-IV型ビッドが2個、総計3個のビッドが検出されている。

遺跡は、標高50m前後の南西向き斜面に立地し、他に縄文時代中期の住居跡等が数軒発見されている。

ピットは、北東—南西方向の長さを有する等、それぞれ乱雑に分布している。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
向 原 遺 跡	千葉県印旛郡本埜村竜腹寺日向原	⑤

概要 遺跡は、東側に沢を見おろす北東向き標高25m内外の台地にある。
2列は方形を呈するピット列とともにB-IV型とC型のピットを2個発見されている。
B-IV型のピットは、長さをほぼ東—西に向け、台地のほぼ中央に位置している。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
山 崎 麩 番 塚 遺 跡	東京都町田市	⑥

概要 B-I型に類するピット1個、麩番塚と称される方形の高塚の下より発見されている。遺跡は、馬の背状の尾根の先端に立地しておりピットは、尾根の線に沿い、長軸方向をほぼ東—西に向けている。
ピット内からは、一切の遺物は検出されていない。高塚中には、縄文時代前・中期の遺物が検出されたという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
下 耕 地 遺 跡	東京都八王子市大谷町	⑩

概要 B-IV型に類する2個のピットが検出されている。
遺跡は、北向きゆるやかな斜面で、標高120m程ある。ピットは、斜面と同一の長軸方向（南—北）をもち、それぞれ、単独に存在している。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
門 田 第 V 遺 跡	東京都八王子市門田町	⑪

概要 B-II型に分類されるであろうピットが4個検出されている。
全例、円形を呈し、規模は直径が1m内外、深さは1m～1.5mを算し、平らな墳底面には、数個から十数個の柱穴状小ピットがみられた。
報告には詳細な図は無いが、これらのピットは丘陵の尾根上に構築されており3個のピットは、直線上にほぼ等間隔に並んでいたとのことである。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
寺 田 No.3 遺 跡	東京都八王子市寺田町	⑬
<p>概要 南北を浅い谷で区切られたゆるやかな斜面で、標高は160m程ある、台地上に遺跡は立地している。</p> <p>A-I型ビット2個、B-I型ビット4個、B-II型ビット14個、B-III型ビット13個C型ビット1個の総計34個のビットが検出されている。</p> <p>ビットは、丘陵裾部に移る転換点の直前の傾斜部末端に多く分布し、崖にあたる平坦部は少ないという特徴がある。さらに丘陵の傾斜に、長軸を直交させるものが多い傾向がみられる。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
寺 田 No.6 遺 跡	東京都八王子市寺田町	⑬
<p>概要 遺跡は、東側に突出する標高160m程の台地上にある、B-I型ビット1個、B-II型ビット5個、B-III型ビット1個の総計7個のビットが検出されている。</p> <p>1、2個の例外を除き、他ビットは、等高線と同一方向の長軸方向を有し、2～3個が対になって配置されているように思われる。少量の縄文時代前期後半から中期前半に位置付けられる遺物が出土しており、これらのビット群も当該時期の所産であろうとしている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
下 寺 田 遺 跡	東京都八王子市下寺田町	⑭
<p>概要 総計16個のビットが発見されており、B-I型が5個B-III型が10個と分類される。</p> <p>全例、扁丸方形に近い楕円形状のプランを有し、長径が1.5m、短径が1m、深さが1m～1.5mの規模を有している。B-III型に分類されるものが多い事が特徴である。これらのビット群は、標高136m内外の高さの所に分布し、長軸方向をほぼ東一西にとるものが多く、斜面の方向と同一の向きをしているものが多い。ビット内から遺物は検出されないが、ビットと堅穴住居跡との切り合い関係より、縄文早期後半から、中期後半までの間に構築され使用されたと考えられている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
高 幡 台 遺 跡	東京都日野市程久保	⑯
<p>概要 北西に向き突出したやや広い舌状台地上に遺跡は立地しており、本類のビット群は、</p>		

46個、舌状台地の中心線に沿って分布している。内訳はB型が全てであり、B-I型20個、B-II型7個、B-III型3個、B-IV型6個である。やはり、タイプ別にグループされ、舌状台地の南西側の側面に列をなすなど幾列かの配列がみられている。各ピットの長軸方向は、配列のグループによってそれぞれの方向を有するようである。

尚、本遺跡からは、縄文前期前半の遺物がごく少量得られたのみであり、本類のピット群の他の遺構は、焼土が数ヶ所発見されているのみであるという。

本類ピットの構築年代は、やはり得られた遺物群との関連性が強いであろうと報告者は考えているようである。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 35 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㉞

概要 3個のB-IV型に分類されるであろうピットが検出されている。長径150cm内外、短径100cm内外、深さ100cm以上の規模を有し、全例隅丸方形のプランを有している。遺跡内では立地は、標高94m～100mの間にそれぞれが独立して存在し、全例長軸方向を斜面に直交している。本ピット内よりは、礫が埋土より出土したのみで、遺物は何ら検出されていない。遺跡からは、縄文時代前半の上器と前期後半の土器が得られている。他に、No. 51, 52, 88, 99遺跡で同種の遺構が発見されている事が記されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 51 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㉟

概要 南向きのゆるやかに傾斜する標高100m内外の台地上に遺跡は立地している。B-II型のピットが北西—南東方向の長軸方向を有しながら1個検出されている。遺跡からは、縄文時代中期頃の土器等が多く得られている。尚、ピット中からは、一切の遺物は検出されていない。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 52 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㊿

概要 南向きのゆるやかに傾斜を有する標高95m内外の台地上に遺跡は立地している。縄文時代早期・中期の竪穴住居跡群にまじって、B-I型のピットが2個、B-IV型のピットが2個検出されている。

ビットの長軸方向は、北西—南東、東—西を向くものがあり、ビットの検出数が少なく、配列等は不明である。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 80 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㊹

概要 北東方向に向く、舌状に近い標高140m程の台地上に遺跡は立地している。B-I型のビットが長軸方向をほぼ南北に向け、1個のみ検出されている。

遺跡からは、縄文前・中期の遺物がごく少量得られたのみであるという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 88 B 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㊹

概要 北向きのゆるやかに傾斜する標高135m程の台地上に遺跡は立地している。

B-II型、B-III型のビットが各1個づれ検出されている。長軸方向は、南東—北西を有し、若干はなれてある。配列があるは考えられない。

遺跡からは、縄文時代中期後半の土器等が多く得られている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 99 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㊹

概要 B-I型ビットが1個、B-IV型ビットが2個報告されている。

規模は、長径150cm内外、短径120cm内外、深さ130cm内外ある、全例隅丸方形に近い楕円状のプランを呈している。

遺跡の立地は、163~165cmの高さに位置し、B-IV型ビット2個は165cmの等高線上にあり、長軸方向は斜面と直交してある。ビット内より遺物は全く検出されていない。

遺跡は、縄文早期の徳永文系土器が出土しており、さらに当該時期の炉跡が発見されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
No. 264 遺 跡	東京都多摩ニュータウン内	㊺

概要 B-IV型に分類されるビットが1個発見されている。

長径160cm、短径115cm、深さ約100cmの規模を有し、プランは、ほぼ楕円形を呈している。開張部が若干広がり、断面形では段があるかのような様相がある。

遺跡は、南向きの標高95m程の台地上にある。ビットの長軸方向は、ほぼ東—西を

向き、台地のゆるやかに傾斜する方向に対し、直交する方向をとっている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
上谷本遺跡C地点	神奈川県横浜市緑区上谷本	②

概要 2個のB-IV型に類するピットがある。

遺跡は、標高46m程の平坦な台地上に立地し、本ピットはその長軸方向を北東—南西、東—西の方向にそれぞれ向きを変えながら接近して存在している。2個より検出されていないため配列の状況等は不明であった。

尚、本遺跡からは、縄文時代前期、弥生時代後期の竪穴住居跡が各1軒づつ発見されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
上谷本遺跡B地点	神奈川県横浜市緑区上谷本	②

概要 B-I型に類するピット2個とB-IV型に類するピットが10個得られている。圧倒的にB-IV型に類するものが多い。

遺跡は47m～44mの標高のゆるやかな斜面上にあり、本ピット群は傾斜の方向に直交する長軸方向（北東—南西）を有するものが多く、傾斜の方向に数列の配列があるよう分布している。

尚、遺跡は、古墳時代の集落跡であり、さらに縄文時代後期の竪穴住居跡も検出されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
東方第13遺跡	神奈川県横浜市緑区東方町	③

概要 北に向け突出した舌状台地の北東向きの斜面上に遺跡は立地している。木製のピットは全例B型で19個発見されている。その内わけは、B-I型8個、B-II型4個、B-III型4個、B-IV型3個である。舌状台地の付け根を横断するように数個のピットが並んで一直線上に列をなす、南西—北東方向に数個づつのピットが並んで4本の列をなす等して配列している。列状に分布する各ピットは、その長軸方向は、列の方向に対して直交するようである。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
東方第9遺跡	神奈川県横浜市緑区東方町	③

概要 北向きの標高50～40mの台地上に遺跡は立地し、北側にむかいゆるやかに傾斜して

行く。B型のピットが40個検出され、さらにこれより若干はなれた西向きに舌状台地の付け根付近にも6個のB型ピットがあり総計46個検出されている。内わけは、B-I型14個、B-II型13個、B-III型5個、B-IV型14個である。沢のある方向に数個が斜面の方向と直交した長軸方向を有しながら一列に並ぶグループが両地区に数グループあり、さらに沢と平行し、斜面の方向と同一方向の長軸方向を有しながら一列に並ぶグループも数グループみられる。遺物も若干ピット内より得られているようであるが、時代決定たる確証は無いようである。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
東 方 第 7 遺 跡	神奈川県横浜市緑区東方町	㊟ ㊿
<p>概要 南西方向に突出した大型の舌状をなす台地上に遺跡は立地しており、検出されたピットは、全例B型で、2期にわたり22個発見されている。その内わけは、B-I型9個、B-II型4個、B-III型2個、B-IV型7個である。その分布は、馬の背上了になった尾根の先端から付け根の部分にまである。各ピットは、台地を横断するように数列の分布と尾根に沿って数列の分布がある。また、舌状台地の付け根部分にも、いく列かのピット群の配列がみられる。各ピットの長軸方向は、そのピットの属する列により変化をみせ、列に属するピットは、ほぼ同一の方向を向いている。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
荏 田 第 10 遺 跡	神奈川県横浜市緑区荏田町	㊟ ㊿
<p>概要 2期にわたり調査され、総計23個のピットが報告されている。</p> <p>遺跡は、北東—南西方向の細長い馬の背状の尾根に6、70mはなれ南北に突出した舌状の台地が付属する。</p> <p>ピットは全てB型であり、その内わけは、B-I型7個、B-II型7個、B-III型4個、B-IV型5個である。ピットの分布の状況は、尾根にそって、2ヶ所ある舌状台地にも尾根上に分布するピットとは別のピットの配列がある。</p> <p>各ピット群の配列の状況は、地形の状況に応じてその方向等が決定される傾向がある。</p>		
遺 跡 名	所 在 地	文 献
池 辺 第 4 遺 跡	神奈川県横浜市緑区池辺町	㊟ ㊿
<p>概要 2期にわたり調査され、B型のピットが総計44個得られている。内わけは、B-I型10個、B-II型12個、B-III型6個、B-IV型16個である。</p>		

遺跡は北東向きに標高45m内外の台地上に立地しており、古墳時代の竪穴住居跡等が発見されている。

各ピットは、数個が1単位となり沢の方に向けて数列、沢と平行するように数列と、個々のピットが同じ長軸方向を有し、列をなし分布している。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
霧ヶ丘第2地区	神奈川県横浜市緑区十日市場町霧ヶ丘	④

概要 北東に向け突出するような感じの舌状台地上に遺跡は立地している。標高は48m内外である。B-II型ピットが2個、B-III型ピットが1個、総計3個のピットが得られている。内2個のピットは対になり台地の先端にある。さらに1個は、台地の中央部に位置している。台地の中央にあるピットと先端にあるピット2個は、その長軸をほぼ南—北に向け、先端にあるもう1個のピットは、2個のピットとはほぼ90°のずれをもっている。

尚、遺跡からは、散石遺構と称されるものが検出されており、遺物は、縄文時代早期後半から前期のものが得られているという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
霧ヶ丘第3、4地区	神奈川県横浜市緑区十日市場町霧ヶ丘	④

概要 遺跡は、北方向に向け突出する2段になった舌状台地上に位置している。標高は73mから40m前後である。本類のピットは、尾根上に分布する群と、1段下った舌状台地の北東斜面から舌状の先端部分にまで分布する大別して2つのグループにわけられる。

ピットはA-III型2個、B-I型3個、B-II型65個、B-III型38個、B-IV型8個と総数116個ある。尾根上に並列して列状に並ぶものを基本型に、沢(谷)に向け列状に並ぶものなどいく通りかの地形に即応した配列があるようである。本遺跡のピット群の特徴としてピット横断面に多数の深い柱穴状小ピットがあるB-II型としたピットが多いという事である。遺跡から他の遺構は、ほとんど検出されておらず、遺物もごく少なかったと報告されている。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
霧ヶ丘第6地区	神奈川県横浜市緑区十日市場町霧ヶ丘	④

概要 遺跡は、北側に大きな谷がある、西に突出した舌状台地に立地している。標高は65m内外である。ピットはB-II型が1個、B-III型が2個の合計3個検出

されている。B-III型は約40m程はなれ伴に同一の長軸方向を有し（北西—南東）舌状台地の尾根上に列をなしている。

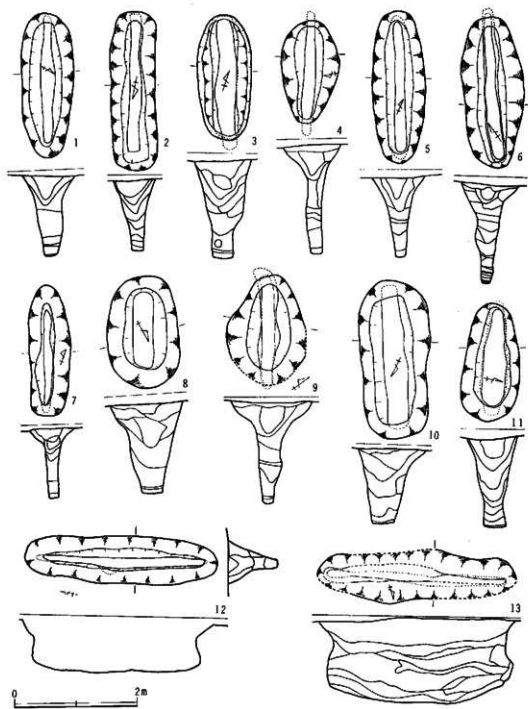
遺跡から得られた遺物は少ないが縄文時代早期・前期・中期に属する土器が若干得られたという。

遺 跡 名	所 在 地	文 献
城の平堅穴群遺構遺跡	長野県茅野市北山柏原区	⑤

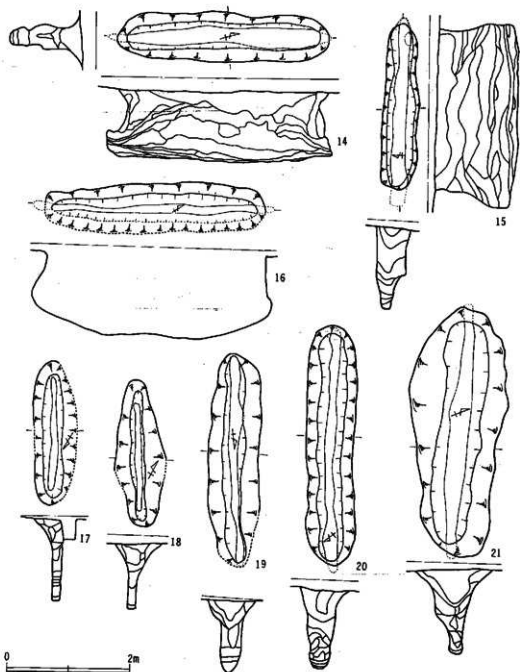
概要 23箇のこの種のピット群が検出されている。末掘のものも多いが挿図によれば、ほとんどがB-I, II型のピットである。

遺跡、ピットからも遺物が多く出土していないようであるが、若干出土しているという。ピットの配列等、地形とどの様な関連にあるかは、地形図が無いため不明であった。ピットのほとんどは、東西方向の長軸を有し、南—北方向に列し、数列の配列がみられる。

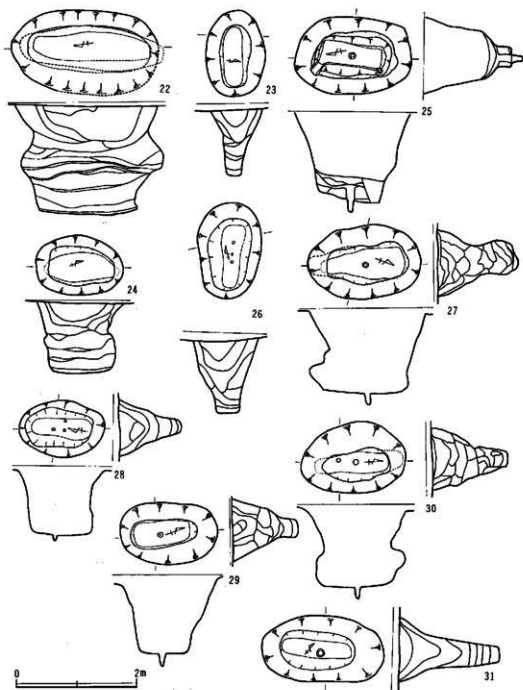
この種はピットは、陥し穴ではないかと始めて考察が加えられた報告である。



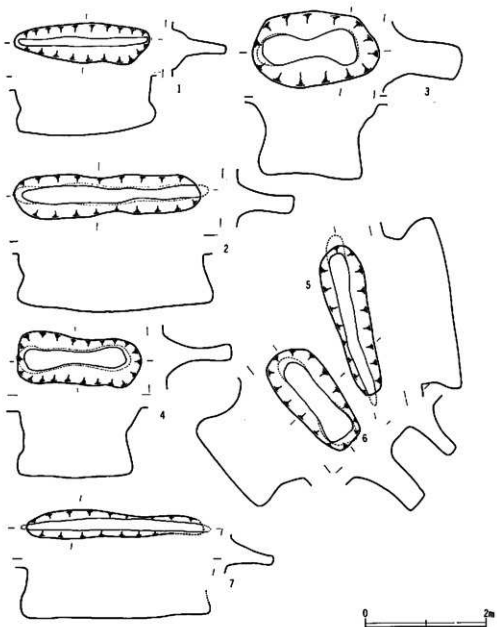
第18図 各地の層穴 札幌市 S 287・288遺跡 (1)



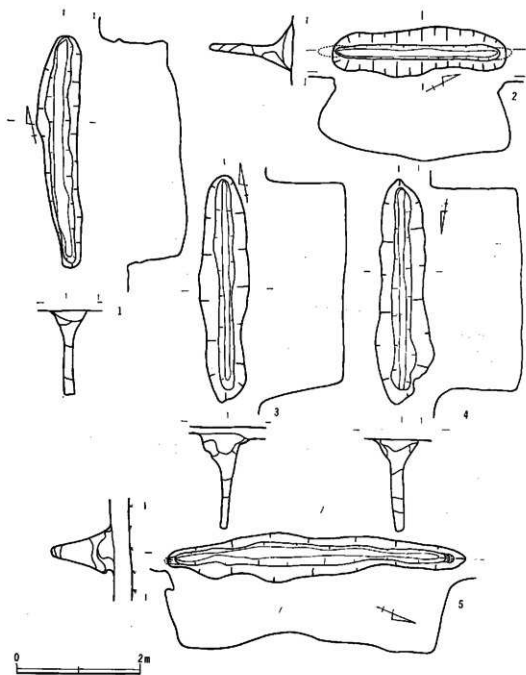
第18図 各地の陶穴 札幌市S287・288遺跡(2)



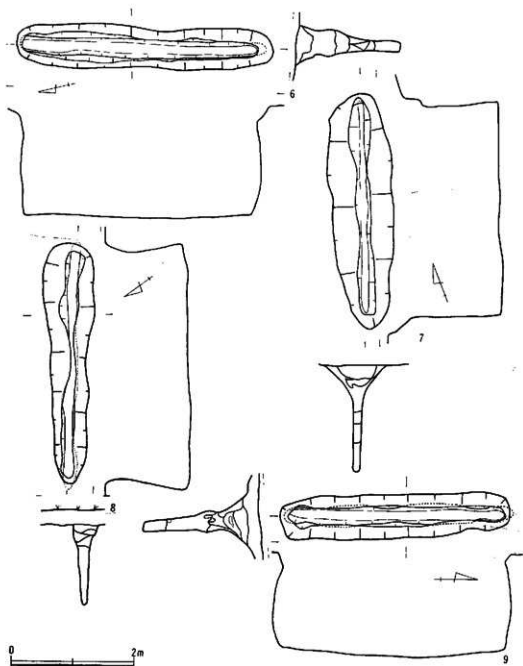
第17回 各地の陶穴 札幌市S267・268遺跡(3)



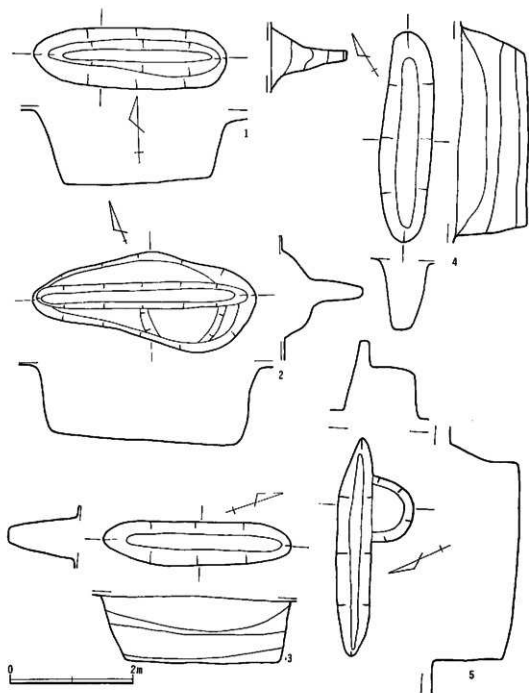
第18図 各地の瓶穴 北海道松前町大津B遺跡



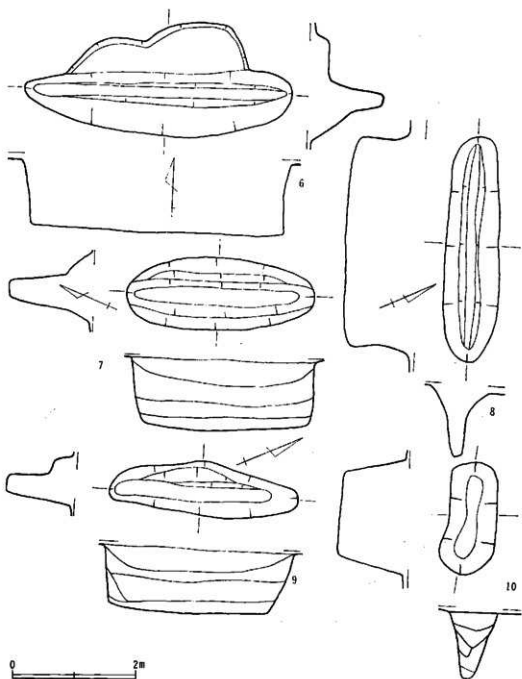
第19図 各地の陶穴 青森県千歳遺跡(1)



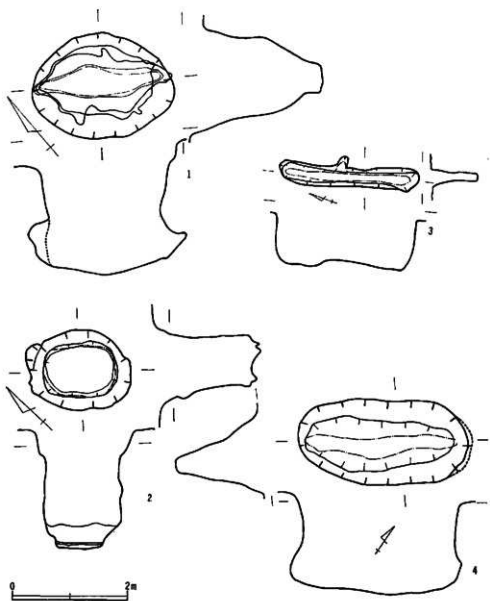
第20図 各地の随穴 青森県千歳遺跡(2)



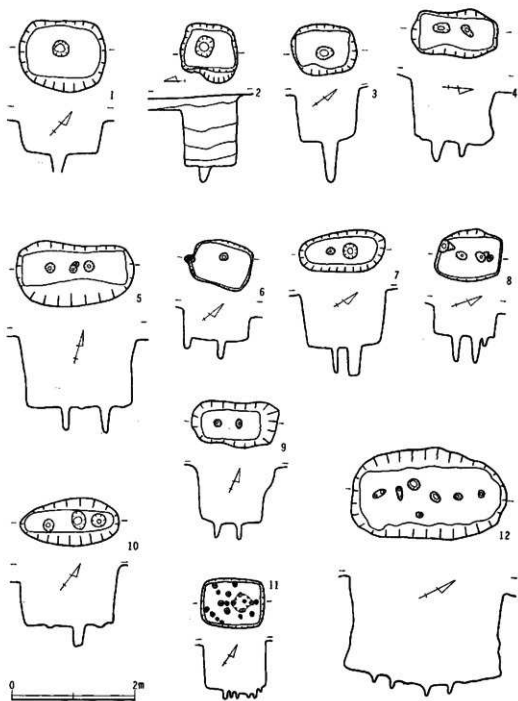
第21図 各地の陥穴 埼玉県坂東山遺跡(1)



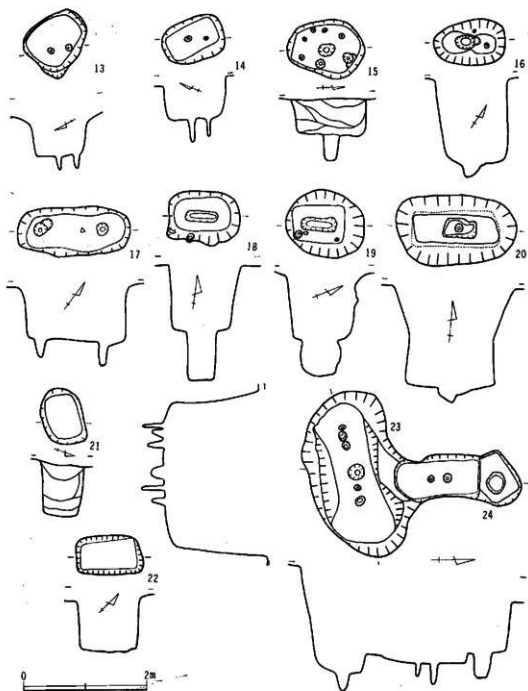
第22図 各地の陥穴 埼玉県板東山遺跡(2)



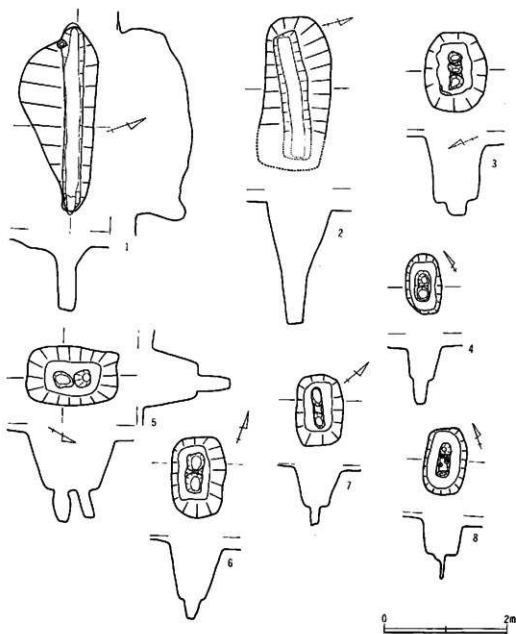
第29圖 各地の陥穴 千粟県上ノ台遺跡



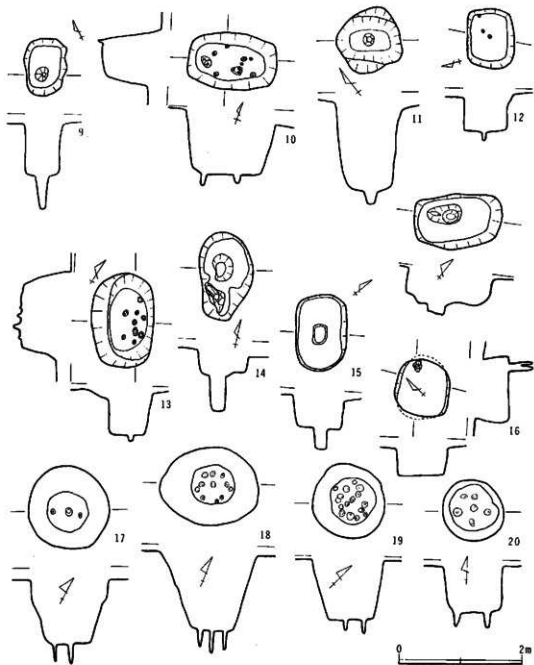
第24図 各地の陶穴 東京都日野市高橋台遺跡(1)



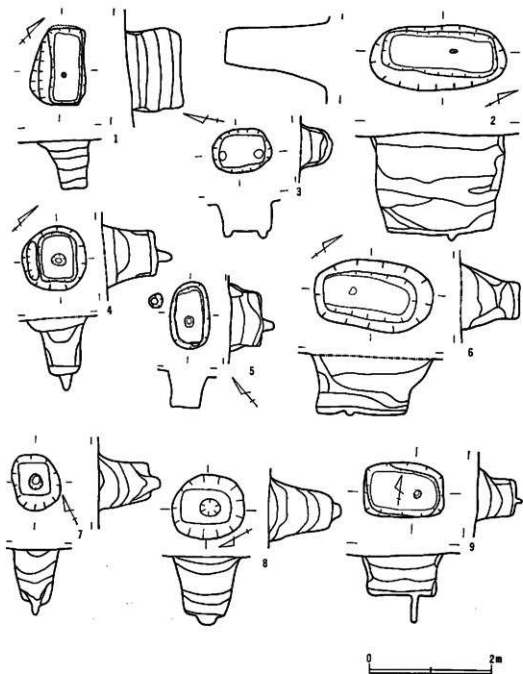
第28図 各地の罎穴 東京都日野市高幡台遺跡(2)



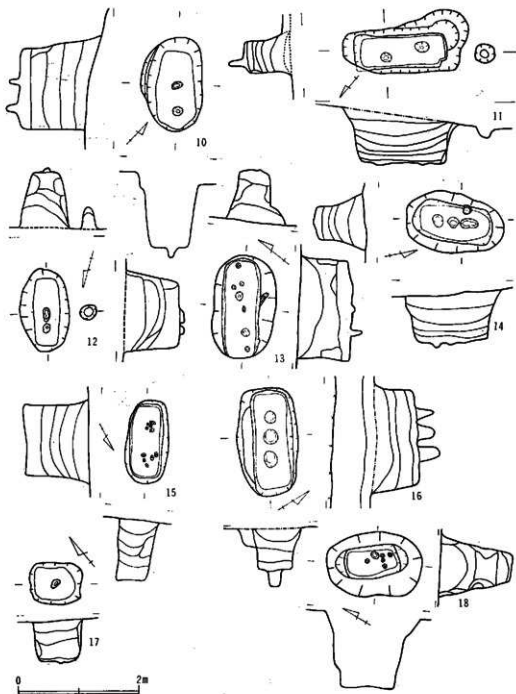
第28図 各地の埴穴 東京都八王子市寺田遺跡



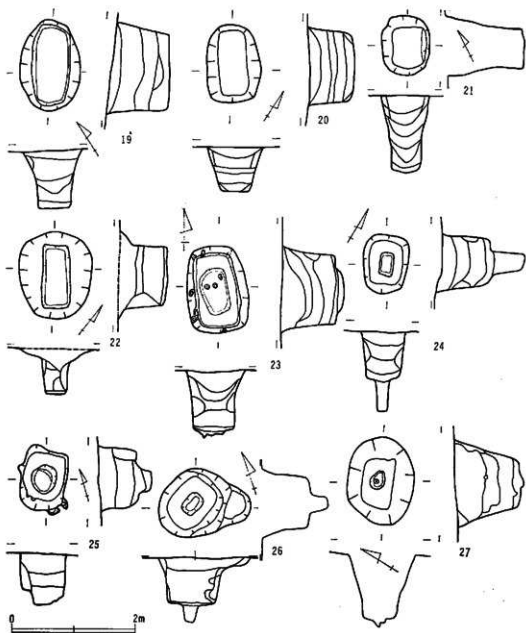
第27図 各地の陥穴 東京都八王子市寺田遺跡 (9~16) 柵田第V遺跡 (17~20)



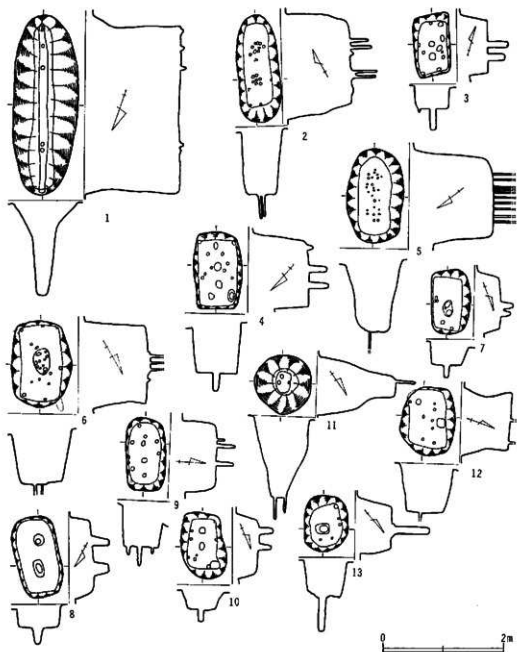
第28図 各地の陥穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群(1)
 1, 2, 東方第8遺跡 3, 4, 6~8 東方第13遺跡
 5, 窪田第10遺跡 9, 池辺第4遺跡



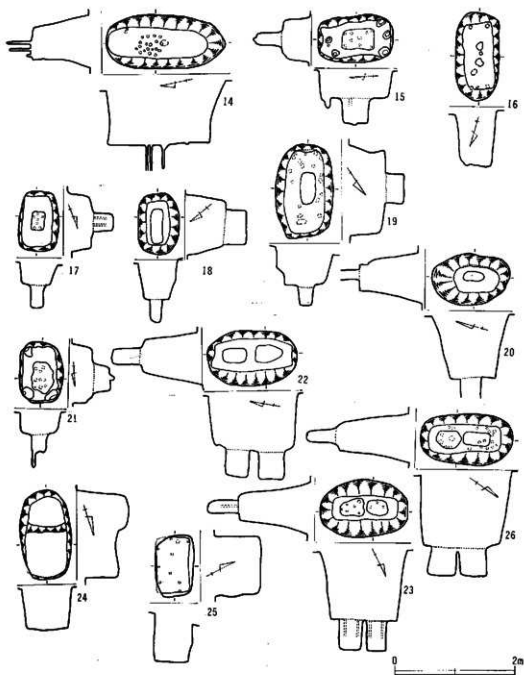
第28図 各地の陶穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群(2)
 10, 14, 15, 17東方第9遺跡 11, 荏田第10遺跡
 12, 16, 東方第12遺跡 13, 池辺第4遺跡
 18, 東方第7遺跡



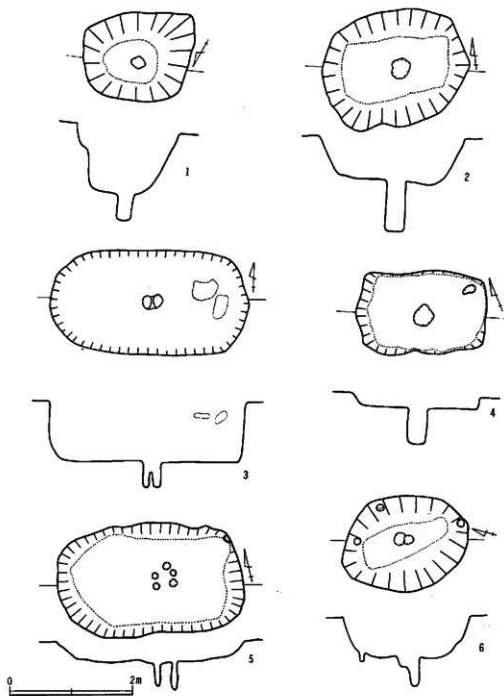
第30図 各地の竈穴 神奈川県港北ニュータウン遺跡群(3)
 19, 20, 23~25, 池辺第4遺跡 21, 27, 東方第7遺跡
 22, 28, 東方第13遺跡



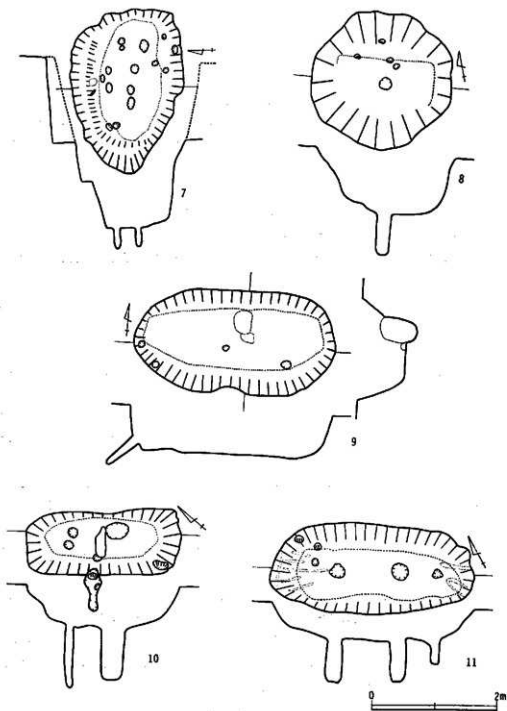
第31圖 各地の陥穴 神奈川県鶴ヶ丘遺跡(1)



第32図 各地の陥穴 神奈川県藤ヶ丘遺跡(2)



第33図 各地の陥穴 長野県城の平遺跡(1)



第34圖 各地の陥穴 長野県埴の平遺跡(2)

結 語

以上本遺跡に於ける発掘調査の結果については前述してきたとおりである。

遺構は、陥穴としての機能が考えられる、溝状を呈する深いビットが個発見され、遺物も縄文時代早期に属する数10片の土器片と、数10点の石器・剥片類が得られたのみというきわめて貧弱な遺跡であった。

遺物の出土がきわめて貧弱であり、しかも発見された遺構が陥穴と考えられているビットのみであり、これらの事実より、本遺跡は、縄文時代の狩猟場ではないであろうかと想像される。

類似の陥穴と考えられるビットのみ発見された遺跡は、近隣ではS262・263遺跡、S239遺跡等があり、神奈川県の高ヶ丘遺跡も陥穴と考えられるビットのみ多数発見されている。この種のビットは、全国的にみると長野県、関東地方から東北・北海道南西部にかけ最近の発掘調査の大規模化に伴い多く発見されるようになって来た。

しかし、遺物の伴うビットはごくまれでありその時期、用途とも必ずしも明らかにされているとはいえない。

陥穴としての用途についても関東地方で発見されているものは、最大のもので径が2m程度であり、近世に使用された「シシ穴」と比較するとかなり小型であり、縄文時代の陥穴とするには異論をとなえる研究者も多くいるようである。

ビットの分布する立地状況、沢（谷）に関連すると考えられる配列の状態は、このビット群が陥穴であり、獣道に沿って作られ使用されたとするならばきわめて自然であり、陥穴として考えるのが今の所妥当であろう。

さて、従来よりの考古学・遺跡学においては、本遺跡のようにごく少量の遺物と陥穴と考えられるビットのみしか発見されていない遺跡は遺物包蔵地として一括して称されていたのが現状である。

この種のビット群の用途が陥穴であるとするならば、縄文人たちの居住した空間としての集落跡、キャンプ跡、狩猟場といったセレメント・パターンを考えるうえにおいて、新たな遺跡学を考えて行かなければならないであろう。

本遺跡をのせる台地上には、先年来より発掘調査されその概要の解っている遺跡が約3.5kmの範囲に8遺跡あり、全例で88個の陥穴と考えられるビット群が発見されている。

しかし堅穴住居跡が発見されたのは、2遺跡で4～5軒よりなく、時期もそれほど差が無いと考えられる。陥穴と考えられるビット群の構築年代が不明の為、住居跡との関連はいま一つであるが、居住空間と狩猟場との関連等いずれ興味ある事実が明らかにされよう。

本報告では、陥穴と考えられるビット群の発見された遺跡を、その地名と伴に分布の状態、ビットの型式についてまとめた。さらに各地域でみられるビット群の様相を図示した。

時間の関係で、中途半端な点は多くあるが御容赦願いたい。

こて地名表を作成するについて、多くの報告書に御世話になったのであるが、報告書に遺跡の地

形図、調査地域の地番すら記していない欠陥報告書が少なからず存在するという事実には驚嘆した。

現在の所、報告書の型式についての基準は明らかなものはなく、調査報告者の判断にゆだねられる所は多い。

発掘調査終了後には永遠に消滅してしまう事実を前提とした行政調査に於いてすら重要な地形図、調査目的、発掘地点の地番等を欠落させた報告書が存在しているといった事実がある。

報告者の姿勢が、問題とされよう。

行政調査に於ける報告書に考察等は、不要だ、土器の型式名すら不必要であり、出土した事実のみ事務的に記述し、図示すれば充分だといった極論も最近する調査者も存在するようであるが、他分野の調査報告書と同様に時の学会の水準で報告書の型を計るのが今は妥当と思われる。

ともあれ、今出版される欠陥報告書の数を若干でも減らすことが重要な課題ではなからうか。

最後に昭和50年度から3カ年にわたって実施した発掘調査により出土した石器に関しては、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター考古計画研究室長 松沢亜生氏からご指導をいただいた。

引用・参考文献

- ①青沼道文他 1977「千葉市芳賀輪遺跡—第3次発掘調査概報」『千葉市文化財報告第2集』
- ②市川修他 1971「横浜市緑区上谷本遺跡群調査報告」『横浜市埋蔵文化財調査報告書』II
- ③市川金丸・古市豊司他 1975「五戸町中沢西張遺跡・古街道遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』29
- ④今村啓爾他 1973『霧ヶ丘』
- ⑤今村啓爾 1976「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27
- ⑥上野秀一 1975「S239遺跡」『札幌市文化財調査報告書』IX
- ⑦上野秀一編 1976「T210遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIII
- ⑧上野秀一編 1977「札幌市文化財調査報告書」XV
- ⑨大沼忠晴・佐藤隆広他 1977『元和』
- ⑩阿田洋子・服部敏史 1974『春日台・下耕地遺跡』
- ⑪阿田洋子・服部敏史 1977『門田遺跡群』
- ⑫加藤邦雄 1976「S153遺跡」『札幌市文化財調査報告書』X
- ⑬加藤晋平・服部敏史 1973『松山院寺』
- ⑭加藤晋平・服部敏史 1975『下寺田・要石遺跡』
- ⑮北林八洲晴・栗村知弘他 1973「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」『青森県埋蔵文化財調査報告書』9
- ⑯北林八洲晴・杉山武他 1974「むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報」『青森県埋蔵文化財調査報告書』24
- ⑰北林八洲晴他 1975「千歳遺跡」13『青森県埋蔵文化財調査報告書』27
- ⑱北林八洲晴・杉山武他 1976「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」『青森県埋蔵文化財調査報告書』28
- ⑲木村尚俊・内山真澄 1978「大曲B遺跡・C遺跡』
- ⑳久保常晴編 1977「高橋台遺跡」『立正大学文学部考古学研究室小報』16
- ㉑久保 泰 1975『松前町小沢遺跡』
- ㉒倉田芳郎 1975「千葉・上ノ台遺跡第II次調査概報』
- ㉓倉田芳郎 1977「千葉・上ノ台遺跡第III次調査概報』
- ㉔河野広道・藤本英夫 「先史時代」『静内町史』
- ㉕河野広道・藤本英夫 1963「御殿山ケルーン群発掘調査報告書』
- ㉖河野広道・藤本英夫 1961「御殿山墳墓群について—第3次発掘報告—」『考古学雑誌』46-4 所収
- ㉗小林達雄・安孫子昭二他 1968「外摩ニュータウン遺跡調査報告』V
- ㉘斎藤 傑 1974「松前町大津遺跡発掘報告書』
- ㉙坂本 彰・宮沢寛他 1972「港北ニュータウン地域内文化財調査報告』III
- ㉚坂本 彰・吉田淑子他 1974「港北ニュータウン地域内文化財調査報告』IV
- ㉛佐藤克己他 1974「一ノ作遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』IV
- ㉜佐藤忠雄 1974「上島松遺跡』
- ㉝佐藤正俊・野尻似他 1977「主要遺跡調査報告書』『山形県埋蔵文化財調査報告書』9
- ㉞高橋正勝 1971「北広島団地第1遺跡』
- ㉟谷井 彪・宮崎朝雄 1973「坂東山」『埼玉県遺跡調査報告書』2
- ㊱千妻健造・高木博彦 1974「向原遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』II
- ㊲千代 肇・加藤邦雄他 1974「西栲杖』
- ㊳千代 肇・横山英介他 1977「函館空港第4地点・中野遺跡』
- ㊴直井考一 1975『Konoporo』

- ◎直良信夫 1963『古代人の生活』
- ◎直良信夫 1965『古代人の生活と環境』
- ◎直良信夫 1968『狩猟』
- ◎中村憲次・斎木 勝 1976『千葉市中野御堂遺跡』
- ◎中村福彦 1970「楚舞台地遺跡」『日本考古学年報』18
- ◎羽賀憲二・内山真澄 1977「S267・268遺跡」『札幌市文化財調査報告書』XIV
- ◎橋本 晋・中田幹雄他 1969『浦河町の遺跡』
- ◎古泉 弘 1972「函館空港遺跡第4地点第81・84号住居址の調査」『先史』8
- ◎古内 茂他 1976「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』V
- ◎峰山 巖・大島直行他 1975「森越一福文前・中期の堅穴住居遺跡一」
- ◎宮坂英次・宮坂虎次 1966「別冊城之平堅穴群遺構遺跡」『藤科』
- ◎森田知忠 1968「函館空港整備事業地内遺跡発掘調査実績報告」
- ◎森田知忠・畑 宏明 1977「美沢川流域の遺跡」I
- ◎曾田 孝・安孫子昭二他 1967「多摩ニュータウン遺跡調査報告」III
- ◎曾田 孝・西家裕他 1968「多摩ニュータウン遺跡調査報告」VI
- ◎曾田隆子・亀田駿一 1977「町田市山崎廣番台遺跡発掘調査報告書」
- ◎横沢克明・石塚久剛他1 974「下郷遺跡」『関越自動車道（新路線）地域埋蔵文化財発掘調査概報』I
- ◎渡辺 誠 1974「食料資源」『考古学ジャーナル』100

第2表 S 411 遺跡遺構一覽表

ピット 番号	開墾部 平面形	開墾部 長×短径(cm)	墳底部 平面形	墳底部 長径×短径(cm)	深さ (cm)	長軸方向	形態	配列	小ピット	土器	石器	備考
1	長楕円形	280×74	長楕円形	265×15	170	N-18°-W	A-I	同列	○			
2	マユ形	230×113	◇	206×15	150	N-22°-W	A-I					
3	長楕円形	218×75	◇	229×19	161	N-1°-W	A-I					
4	◇	225×93	◇	182×17	160	N-11°-W	A-I					
5	◇	205×83	◇	183×13	172	N-15°-E	A-I					
6	マユ形	205×118	◇	162×32	161	N-89°-W	B-I					

第3表 S 411 遺跡出土石器類計測表

検出番号	出土地区	類 別	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
1	表 採	石 鏃	24.5	13.0	2.5	0.55	黒 燧 石	柄部のみ 石 匙
2	◇	◇	32.5	11.0	3.0	1.0	◇	
3	◇	◇	29.5	12.5	3.5	1.4	◇	
4	D-2	◇	29.5	12.5	2.0	0.7	◇	
5	表 採	鋸 先	32.5	21.5	7.0	3.2	◇	
6	◇	◇	16.5	11.5	4.5	0.75	◇	
7	D-1	削 器	19.0	18.0	3.0	1.2	◇	
8	表 採	◇	51.5	22.5	7.0	7.25	頁 岩	
9	◇	◇	21.0	15.0	3.0	1.1	黒 燧 石	
10	F-5	◇	20.0	11.5	2.5	0.7	◇	
11	表 採	石 斧	58.0	54.0	22.0	102.0	緑色片岩	
12	D-3	石 錘	67.0	49.0	16.0	76.1	安山岩	
13	表 採	◇	91.5	53.5	18.0	110.65	◇	
14	◇	◇	62.5	50.5	14.5	66.55	◇	
15	I-8	◇	58.0	53.0	13.0	61.85	◇	
16	E-4	◇	77.0	76.5	30.5	192.1	◇	
17	E-4	◇	97.0	94.5	25.5	149.35	◇	
18	I-2	石鏃・砥石	63.0	46.5	11.0	51.3	砂 岩	
19	D-1	◇	70.0	49.0	16.5	78.4	◇	
20	E-6	砥 石	70.0	56.0	41.5	177.0	◇	
21	表 採	◇	29.5	34.0	23.0	41.5	◇	
22	◇	◇	63.0	47.0	29.0	82.1	◇	
23	E-1	◇	74.0	52.5	30.0	135.7	◇	
24	E-4	◇	73.0	49.0	39.5	224.9	◇	
25	表 採	礫 石	122.0	60.5	27.0	311.9	安山岩	
26	表 採	石 皿	170.0	140.0	70.0	2400.0	◇	

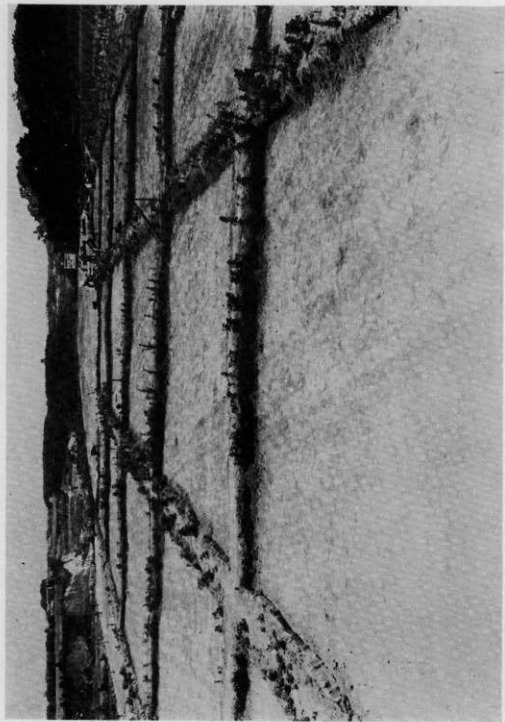
图 版



A 遺跡遠景（北方向より）



B 遺跡遠景（東方向より）



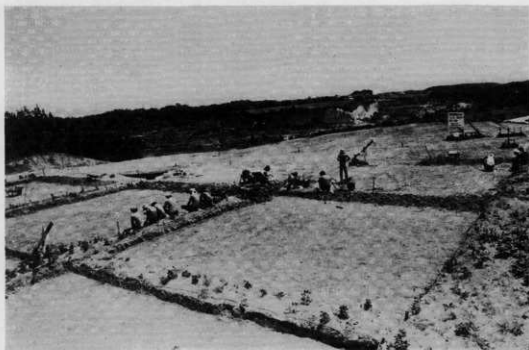
舞臺区（北西方向より）



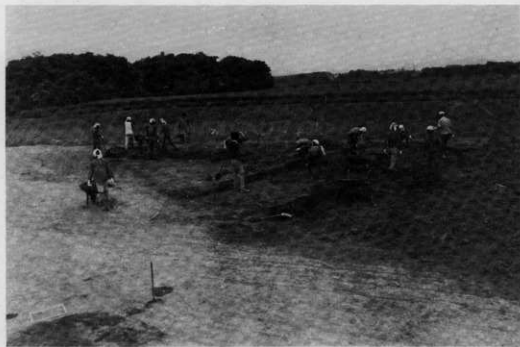
A 発掘区（南方向より）



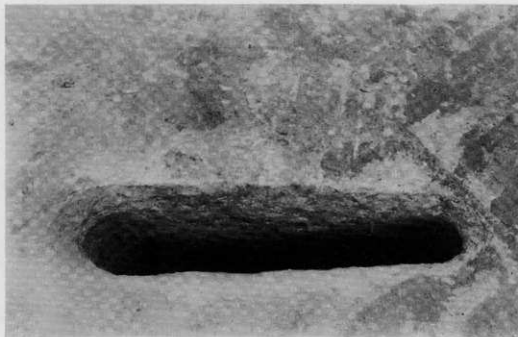
B 発掘区（北西方向より）



A 発掘区（西方向より）



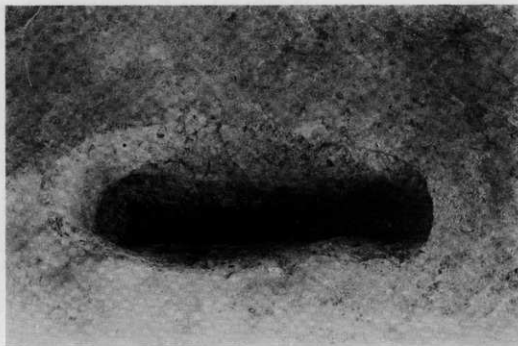
B 発掘風景



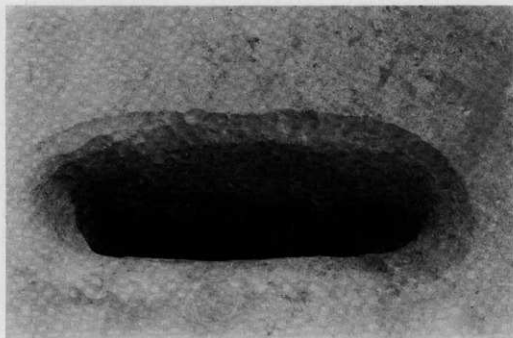
A 第1号Tビット



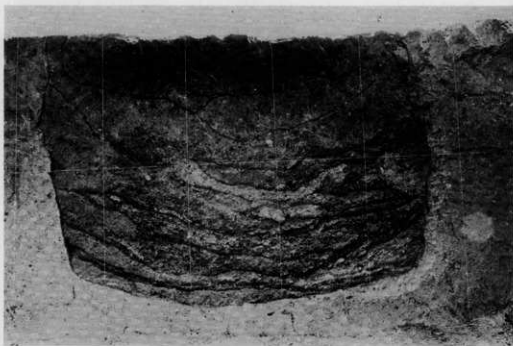
B 第2号Tビット



A 第4号Tビット



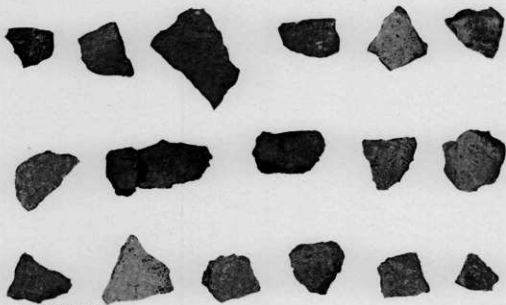
B 第5号Tビット



A 第3号Tピット 長軸断面



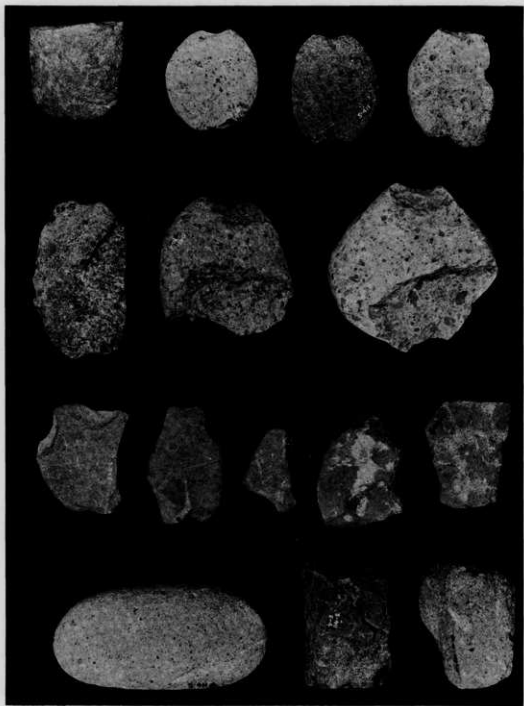
B 第6号Tピット 短軸断面



A 免掘区出土石器



B 免掘区出土石器



兔狍区出土石器



尧棚区出土石器

札幌市文化財調査報告書XVIII

昭和53年3月25日 印刷

昭和53年3月30日 発行

S 411遺跡

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 中西印刷株式会社
札幌市東区東苗穂町505番地